毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治三十年四月廿五日發兌

第百號

編輯主任 幸田露伴

新小說

第貳年第四卷目次

小說
可憐任 山田美妙
かけ皿日記 小杉天外
花まくら 正岡子規
出雲お國 福地櫻痴

譚藪
反魂香 幸田露伴
幕末政治家の容貌風采

評苑
北條早雲、笠の露、其他
數十件

時報
十數件

挿畫
花ト美人圖 コロタイプ

文豪畫伯肖像
志賀矧川
稻野年恒
右田寅彦
朝比奈知泉
井上巽軒
宇田川文海
井上圓了
塚越停春樓
飯山眠花
小山正太郎
戸川秋骨
二十年
中村雪後

川尻寶岑
島崎藤村
右田年英
村田丹陵
尾形月耕
寺崎廣業
山縣悌三郎
戸川殘花
前田曙山
大野洒竹
佐々醒雪
前の
末松青萍
以上諸先生

依田學海君自畫自贊
森田思軒君自筆原稿
尾崎紅葉君自筆原稿
森鷗外君自筆原稿

本誌實價 一冊金十五錢
五冊前金五十七錢五厘 十冊前金一圓四十錢 郵税各二錢

東京日本橋區通四丁目
發行所 春陽堂 （電話本局五十一番）



○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味乏きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる**スコット乳菓**が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に**虚弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身體となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身體を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコット乳菓**は能く咳嗽及風邪を去り肺臓を強くして活力を與ふることを實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虚弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の說明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す

左の大取次所の外各藥舗にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田清右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

新刊

華族女學校
學監正五位
下田歌子述

家庭要訓

上製美本
全一冊
正價廿錢
郵稅四錢

發兌
東京神田區新石町
同文館

大賣捌所
大阪備後町四
吉岡平助

徳富健次郎著

十二文豪第十巻

トルストイ

定價廿五錢
郵稅四錢

トルストイは實に露國の一異物、のみならず世界の奇觀である。其國柄からしても、文豪としての位置からしても、所謂トルストイ宗の開山たるからしても、今日に比類なき興味を有する人物である。著者の不學無術あへて其面目を詳悉したとは云はぬ。併し微弱な力に出來る丈は盡した積である。讀むも讀まぬも諸君の御隨意とは云ひながら、若も今迄一巻として世に出でたことのないトルストイの一生を兎に角一巻にまとめて、誠實に描かんことを試みた此「トルストイ」の一讀を諸彥に推薦しなければ、著者は諸彥に對して不忠實なるもの、徒謙徒遜なる者であらふ。故に是非〳〵諸君の一讀を請ふのである。

發行所
東京市京橋區日吉町
民友社

民友社出版書目社告

●青少年諸子に適當なる讀本●

少年史譚第一篇	阿部仲麿	定價六錢	郵稅二錢
少年史譚第二篇	阿新丸	定價六錢	郵稅二錢
世界叢書第一篇	ダーウヰン	定價十五錢	郵稅四錢
世界叢書第二篇	鐵道王グールド	定價廿錢	郵稅四錢
世界叢書第三篇	マゼラン	定價廿錢	郵稅四錢
少年傳記叢書一	フランクリンの少壯時代	定價十二錢	郵稅二錢
少年傳記叢書二	兩ケトー	定價十二錢	郵稅二錢
少年傳記叢書三	リンコルン	定價十二錢	郵稅二錢
少年傳記叢書四	子ルソン 上	定價十錢	郵稅二錢
少年傳記叢書五	子ルソン 下	定價八錢	郵稅二錢
民友社編纂	日清軍記 前篇	定價十五錢	郵稅四錢

民友社編纂	日清軍記 後篇	定價十五錢	郵稅四錢
民友社編纂	征清壯烈談 第一	定價十三錢	郵稅二錢
民友社編纂	征清壯烈談 第二	定價十錢	郵稅二錢
第一第二合本	一語千金 袖珍	定價十錢	郵稅二錢
民友社編纂	日韓會話大全 クロース	定價三十錢	郵稅四錢

●高等小學等の教科用に妙也●

家庭叢書第一卷	家庭の和樂	定價十錢	郵稅二錢
家庭叢書第二卷	夏の家庭	定價十錢	郵稅二錢
家庭叢書第三卷	玩具と遊戲	定價十錢	郵稅二錢
家庭叢書第四卷	家庭教育	定價十錢	郵稅二錢
家庭叢書第五卷	小兒養育	定價十錢	郵稅二錢

新刊發賣

木戸孝允

定價廿錢
郵税四錢

本社出版の傳記評傳各書は世已に定評あり、其今日に至り重版續出、盛に世の需めに應じて止まざる、以て各書の價値を評定するに足りぬべし。今本書「木戸孝允」評傳の刊行成る、本書は孝允成長の初めに起り、艱難備に嘗め、遂に維新の大業を翼成せるに至り、着筆精細、評論從横、附するに其諸建白詩文等を以てす。皆經國慨世の大文字也。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

民友社編纂(第三版を重ぬ)

金貨本位はやわかり

定價拾錢 郵稅貳錢

貨幣法は愈ゝ頃日の官報を以て公布せられたり、而して其實施は僅々六ヶ月の後にあり、左れば吾人は此の短日月間に是非共之を了知せざるべからず、此書之を說明して平易明晰

世界經濟上の變動

價十二錢 郵稅二錢

本書か初て出版せしは去る明治二十六年四月にあり彼の印度幣制改革の擧ありて銀價大暴落を來たせるより二ヶ月前なりとす、世人は歐米諸國が金貨本位を採りし爲めに產業社會に不景氣を來たせりと想へり本書は生產分配機關の改良—即ち天然力の應用と運輸交通の大進步が生產超過を來たし隨て歐米諸國の物價を低落したるを論證せり世人は金貨の欠乏よりして金價騰貴したるものにして銀價は餘り低落せず隨つて金貨國の困難を來たせりと思へり本書は金貨の需要敢て增加せしにあらずして銀の供給に非常に多きを致し隨て銀價の低落を來たしたること他の物價下落の理由と一般にして歐米の困難は干涉保護政策より來ることを論ぜり近頃本書を讀める人、本書を評して云はく本書の出版は五年前に在りと雖も宛も豫め今日の經濟問題を論せる感なくんばあらずと、然り本書は獨り今日金貨本位の結果に關する問題に參考多きのみならず今日の經濟問題全般の參考として裨補なくんばあらず是を以て此際特に經濟上に注目せらるゝ讀者に本書を推薦す

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

社會百方面 豫告

題して百面といふ、必らずしも百種の社會を盡くものにあらず、然れども社會の內部を視るに一種の眼光ある乾坤一布衣が多年の實踐を傚ひ來ッて成るもの、篇中**貧童墮落**は社會改良の資材を供し、**足尾銅山**は世に隱微せる鑛夫の生活を記載す、其の特殊なる風俗を寫せるものゝ中には支那、朝鮮、臺灣の各項あり、下層社會の生活を寫せるもの中には、坐業者、屑品買、象職工の內狀あり、猶奇警なる觀察と勁拔なる筆鋒と兩々相助けて此の社會の內秘を描ける**醜窟の半面**は坎坷山人を傚ひ來ッて本篇の附錄に收む、

發行所 民友社

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵稅共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 吉崎圓吉　編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

本社電話番號本局七十番

明治三十四年四月廿五日發行

家庭雜誌第百號

目錄



小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

鍾　馗　圖　　（久保田米仙筆）

家庭雜誌第百號

（明治三十年四月二十五日發兌）

第百號刊行

人生十事九敗意、春事三分二已空。何事も思ふに任せぬは斯の世の慣ひぞかし。つら／＼顧るに、嚮に吾人か社會國家の改善は到底其根本地盤より改善せざるべからざるを感じ、家庭を改革して新家庭の安する所新國民の生育する所となさんと思ひ立ち、遂に家庭雜誌の發兌を餘義なくしたるは、實に明治廿五年九月の事に屬す。烏兎匆々、今茲三十年四月に至る已に五十有六月を閲し、足掛け六年に及び、號を重ぬることこゝに第一百也。既に已に久しからずとなさず。而して吾人か當初の希望は、知らず如何に相酬ゆることとを得たりや。

勿論吾人の事と雖、思ふに任せぬ世の慣ひをば漏るゝ能はざるべし。吾人は決して今日の効果を以て其當初の希望に酬ひ得て足れりとなすものにあらず。然れども亦決して無下に失望するものにもあらざる也。獨り無下に失望せざるのみならず、自ら顧みて大に相慰むるに足るもののあるを見る。

社會改善といひ、家庭改革といふ、もと白紙に墨汁を點したるが如く明かなる反應を見るべきものにあらず、例之は水の潤ほすか如し。水は砂中に浸潤し去る遂に其迹を見るべからずと雖、之が砂地はいつしか變じて草樹繁生の地となるにあらずや。

我か家庭雜誌の如きも、今現に日本の家庭は斯く／＼の影響を及ぼし、日本の社會に斯く

〱の効果を生じたりといふことを能はずと雖、一方に讀者の日に益多く、同志者の著しく其數を增し、こゝに百號に至て一層大に其歩を進ましめんとするを見れば、吾人の所論が社會の地盤に浸潤し去るもの日に漸く廣く且つ深からんとするを知るべからざるにあらず。

其赫々の功あらんよりは寧ろ冥々の補ひあらんことを期するは、實に家庭雜誌の希望なると共に、所謂家庭改革なるものゝ性質自ら然る也。若し其浸潤の効果幾分か家庭の砂地を變じて、多少新家庭を安んじ新國民を長養するに足るべき和樂健全なる地となすを得ば、獨り吾人の幸のみにあらざるべし。

六年の歳月、一百回の發兌、久しからざるにあらず、多からざるにあらずと雖、家庭改革社會改善の事業上より見れば、唯纔に一歩のみ一瞬のみ、吾人の事業は方に始めて其程を發したるに過ぎざる也。

庭つ鳥啼くはそらねかながむれば（成章）
また峯遠き有明の月

吾人たるもの、豈自ら勉めざらんや。

百づくし



百戰百勝

論説

家庭の眞價

萬國矯風會日本特派員 クラヽ、バリシユ女史

家庭の眞價を高むるは武器をとりて國を守るの勇に勝れり、家庭は國民の摸範たるべきなれば國民品性のいかんは家庭のいかんによるべしと謂つべし故に家庭を純潔ならしむるは全國民を純潔ならしめ且つこれを强大なるものとなして、國に盡すの最大なる義務たるなり「純潔なる心の人は十人の力を有てり」といへるは眞なるかな、

古來家庭影響の大切なるを知りこれか爲め全身全力を獻して一國政府の公益を增進せし男女の數またおほし、もつて社會改革のいかなる事業も家庭にはじめずして成就すべきものならざるを信ずるに至らしめたり、嗚呼純潔善良なる市民は先づ純潔善良なる家庭あつて而して後に存するか、

賢明なる皇帝國既にこの眞理を認められにき、邦諺に「我住む宿こそ宮殿なれ」また「笑ふ門には福神來ます」と云へるなど、今の世の人この宮殿のはたして莊飾器具の立派華麗なるのいひにはあらで、また福神とても金銀の神をいへるならざるを知り給へるなるべし、賤が伏屋も清き心の親切なる所の充てるこそ玉のうてなにも勝りて心ゆたけく幸福を覺ゆるなれ、この心の幸福はまたなき福の神の御幸臨とぞいひつべかんめる、かゝる幸福なる宮殿に成長せし男女こそ眞實善良のものたるべけれ、吾人は未來の樂天につき語ること多しといへ地の上現在の世にて神に對し人に對しまた自己に對してまことある家庭の樂天を見るべきこと思はざるは何故ならん家庭の爲すべき義務を三大別して、第一家人の健全幸福を保護すべきこと、次を善良

なる國民を出すべきこと、第三を暗黑を照らす光となりて我より一層不運に沈める家庭を救ひ助けこれを高めて眞の幸福を爲せしむべきことなり、斯くて第一の大切なるは云ふまでもあらざれど、善良なる家庭の第三の影響また最重大なりといふべし、

身欲は人生の最美なるところを蔽ひさるべきものなれば人はつとめて身欲を避くべきものにこそ、我々家庭になすべき務を知れりといはん人、若し他の家庭におよぼし爲すべき務を知らざるときは、その人の知れる同情他愛の心は未た空飛ふ鳥野に行く獸にだも勝たるにあらず、そは鳥獸なほ雛を愛して養ふことを知ればなり、故に最良なる家庭に望むところは、啻におのが家庭に盡すの義務を知るのみならず、そをもつて足れりとせず廣く他の家庭を助けて公益をはかられんことなり、また最良の父たる人には隣家の子女を救ひ助くることをおのれ子女を思ふが如くならんとを、かくして人は互に相助けもつて幸福なる生涯を全ふすべなり、

家庭は子女一生に必要なる敎へのすべて大切なるものを敎ゆべき所なれば、學校敎育者の責任にまさりて重し、家庭をして信實、正直の德を敎ゆるところならしめんか、此處に成長せる子女は後日の社會に立ち此等の德を實行すべし、然るにこれに反して身欲、嫉猜の惡德を敎ゆる場所たらしめんか、子女は必ず惡德を行ふものたるべし、子女は大人の言を聞くよりも寧ろ行爲を見て効ふものなり、或時一老紳士ありて娘にむかひ「我れ今より市中に行かんとすれば汝身の爲めにも美しき着物仕立つかはさん」と云へるに娘は父の顏を見上げながら「それでもお母さんはそうしないでしよう」「何故お母さんかそうしない――お母さんはそういひましたか」「お母さんは何時もお仰るゝとして下すつたことはないのですもの」と答へたりとぞ、

此の母の其の娘に僞り敎ゆる心なかりしは自然ならん

が僞を行ひて敎ゆる其影響は實に恐るべし、而して世間また此の母の如き母少なからずとなす、人の親たるものに女を敎ゆるに當り子女を僞はることの左程に大害あるを思はさるものあれども、こは最も大切なる誤なるべけれ、家庭に於ける不正直の先例ほど人の生涯を誤らしむるものまた他にあらざるべし、然るにこの恐るべき悪例敎育を受けながら成長するおほくの子女あるを見るは最も悼むべきにあらずや、

故に吾人は世の慈母嚴父に望むところはかりにも子女を僞ることなきこととまたいかなる忙しき場合にも小女のもの問はんとするときはよろこびてこれに答へ、また子女の好んで爲さんとするところは道ならぬことのほか奬勵してなさしむは最もよろしかるべし、

凡そおほくの美はしき家庭、必すしも富豐なる宮殿の如き家庭にあらずとも、淸潔安全なる器具、滋養食品など其他善良なる書類の備りたる平和の充ちたる幸福なる家庭を欲するは蓋し余輩一人の希望に非ざるべし、

百づくし



百錬鐵

社説

兄弟

人の世に在る自治獨立にして依賴心なきを尙ふこと論なしと雖、旅は道連れ世は情け、社會は實に共立のものなれば、其身を立て產を治むるとは何處までも自治獨立ならざるべからざれども、社交上の同情に至ては相交すことを妨げず。單り相交すことを妨げざるのみならず、互に同情を相交してこそ、乃ち社會の社會たる甲斐はあるなれ。

特に兄弟姉妹は所謂骨肉連枝の間にして、もと相離る

ゝ能はざるものあり、歡びにつけ悲みにつけ互に眞實の同情を交はして相爲に心からの涙を濺ぎ心からの笑ひを催すは兄弟姉妹也。

所謂『棣棠の華、萼として韡々たらざらんや。凡そ今の人、兄弟に如くは莫し。死喪の威れ、兄弟孔だ懷ふ。原隰に裒る、兄弟求む』なるもの。世に骨肉連枝の間ほど頼もしきはなく、兄弟姉妹の仲善きほど美はしきはあらず。

然れども一方より見れば兄弟は則ち他人の始也。人の稚少なるや、弟兄姉妹同じ臥床に臥し、同じ食卓に食ひ、手を携へて學校に登り、相喚びて樹下に戯れ、時にわけもなき爭ひをなす如きことなきにあらざれども、又わけもなく相歡びて、何の隔意腹藏もなく、眞に連枝骨肉なるに、已に年長じて各妻を迎へ或は嫁に行き互に其家を有するに至りては、恩情復た舊の如くならず。其相善きものと雖、之を他人の親しきものに比するに其相勝ること竟に幾何ぞや。若し其相善からざるものゝ如きは、互に父母の遺産を爭ひ甚しきは讐敵啻ならざる也。

此くの如きもの寧ろ其情ならんや、相共におどけなく無邪氣に嬉戯したる少時の歴史を回顧すれば孰か油然として再び相棄て難きの思ひを生ぜざるべき。唯遠きものは日にうときならひにして、各自一家をかまへて世の事繁きにまぎれ、來往音信も疎遠がちになり、遂に友情までも知らず識らず減殺せしむるのみ。

去れども眞に其同情を相交はすべくして、竟に第二の我第三の我たるべきものは、則ち兄弟姉妹を措て他にあるべからざれば、其兄たり弟たり姉たり妹たるものは、永く相互の友情を減ぜざらんことを勉め、各別に家をなすに至りたる後も常に相來往し、其遠方に在るものは屢相音信れて雁の便りにも彼此の溫情を維きとむべし。

特に兄弟姉妹の友情は、妻子夫婿あるに及びて之に愛情を注ぐの專らなるより自づと衰ふるものなれば、人の妻子たり夫婿たるものは最も注意して其夫たり妻たるものに友愛を失はざらしむべくし、又父母在るの日は言ふもさらなり、父母已に歿して後も誕生日忌辰祭日より、花見涼み月見雪見等四季折々の良辰佳節には、成るべく數家族相會して其友情を温むるを要す。平昔事務繁くして數〻來往する能はざるものも、姉妹兄弟相共に家族を伴ひ、打揃ふて一大團欒をなす如きことあらん乎、互に友情を新にし得べきのみならず、宗族の輯睦を來し、彼此の清福之に加ふるものなかるべし。

古詩人岑參が韋員外が家の花樹を歌ひて、『今年の花は去年の好きに似たり、去年の人は今年に至て老ゆ、始めて知る人老て花に如かざることを、惜むべし落花君掃ふこと莫れ。君が家の兄弟には當るべからず、列卿御史尙書郎、朝より回て花底恒に客を會す、花は玉缸を摸て春酒香し』といひたるも去ることにて、兄弟友愛の情掬すべく、王維か九日山東の兄弟を懐ふて、『獨異鄕に在て異客となる、佳節に逢ふ毎に倍〻親を思ふ。遙に知る兄弟高に登る處、遍く茱萸を挿んで一人を少ん』と吟じたる如き、至情惻々人を動かすものあり。姉妹兄弟の間自ら然らざるを得ざる也。

唯兄弟姉妹の間と雖相愼むべきは、金錢貨物の貸借乞假也。互ひの不和愛相づかしは、實に多く此の貸借乞假より生ずるものなることを知らずや。

百づくし



百歳の契

史談

薄命なる姫君

たんぽゝ女史譯

世には不幸薄命なる者いと多くある中にジェン、グレー姫の御身の上ほど哀れ果敢なきはなし此姫僅か九日の間英國の王冠を戴き給ひし故をもて朝敵の罪逃れ難く遂に空しく刑場の露と消え給へり今其物語を記るさんに姫は西曆一千五百三十七年英國のブラドゲートといふ所に生れ給ひ匿理第八世の妹君メリーの御孫女にておはしきメリーの君は御容顏嬋娟に御姿優にやさしきが上に凡ての人に愛せらるべき御性質を備へ給ひしといふ始め佛王ルイ第十七世に嫁き給ひしも程なく王薨去ましませしをもてサホークの公爵チャーレス、ブランドと再婚して擧け給ひしフランセス姫はドーセットの侯爵ヘンレー、グレーに嫁して三人の姫を生み給ひぬ其一の姫こそジェン姫なれ燒野の雉子夜の鶴生きとし生ける者其子を愛寵しまぬ者やある况して御容顏玉の如く御心情優美御才智凡々ならぬジェン姫の如きは御兩親の御覺えも一層めでたかるべきに姫が御身の上は世のつねのほかにて未た幼少におはす頃より御兩親のやさしき御情を御身に覺え給ひしことゝてなく常に疎々しき待遇をのみ受け給ひしかば他の見る目には繼子にてはおはさずやと怪しまれたりされば姫は御幼少の頃よりもの、書を讀むをもて此上もなき娛樂となし給ひ當時博學の名聞ありしローガー、アスチャンを師として諸の學ひの業を修め給ひければ東の間に著しき進步をなし給ひぬ其比ひ稀なる御容姿御聰明なる御性質非凡なる御才能に舌を卷かぬ者とてなかりき。

姫未御幼稚に在す頃早ラテン語と希臘語の大概は解し得稍長し給ひては此兩個國語に委敷通曉し給ひぬ御年

十四の春よりはギリシヤ語もて歐洲の有名なる碩學耋と書簡の交を結び翌年はヘブル語の研究を初め給へり又哲學をいと好み給ふてソクラテスやプラトなんどの著述を原語のまゝ讀むを樂しみ給ひしといふ

斯く姫は才學秀でゝ古今の書を普ねく渉獵し給ひしが其最も愛讀し給ひしは聖書なりき而してギリシヤ語もて記せる一巻の聖書をば御身離さで其蘊奥を推究め給へりこれぞ姫が御徳のいや高くして萬世の末までも芳ばしき御名を殘し給ひし所以なれ

當時姫が生長ち給ひし宮中は華美奢侈浮薄を極めたりしも確固不拔なる姫は其弊風にはつゆ染み給はで濁江の蓮花高潔にして單純且つ柔和謙遜にておはしき サアー、トマス、チヤーレス、姫を評しけるは「彼女は八個國の語を操り、機敏にして學識あり、技術に妙を得、音樂を能くし、筆跡見事なるも、尚ほ柔和謙遜なり」と又フォークスは「彼女は十六才にして小兒の清淨無垢、妙齢の美、中年の確實、老年の沈着、此等の諸德を皆兼ねたり」と云へり

斯く才と德とを兼ね備へ給ひし姫にして他人の慾望の犧牲となり果て給ひしこそ無慘なれ抑西暦一千五百五十三年姫はノーサンバランドの侯爵の子息ロード、ギルホルド、ダッドレーと御婚儀整ひて目出度合卺の大禮を擧げさせ給へり折しも王エドワルト第六世は肺患に犯され給ひて御生命もはや旦夕に迫りゐれど未だ位を繼ぎ給ふべき太子定まらねば上は廟堂にありて政を執る人々より下は秣苅る賤が男に至るまで深く憂慮せぬ者とてなかりきチユーダル家のメリーを女王となすは一般の民の望むところにてはあらざりき蓋はメリーは熱心なる羅馬敎徒なれば王位に昇らば新敎徒等が千辛萬苦して得たる宗敎上の權理自由を忽ち褫奪すべければなり

ジェン姫ロードギルホルドが許へ入輿ありて琴瑟相和

し偕老の契長かれと祈り給ひし甲斐もなく忽ち深き悲哀は姫が御身に來りて束の間結ひ給ひし鴛鴦の睦き夢を破りしこそ果敢なけれ

エドワルド第六世はジェン姫に位を讓るべき旨遺言して遂に空しくなり給へりされば姫が舅ロードダドレーを初めすべて姫に緣ある人々は皆己が身に權勢榮華を得へき好き時機は來れりと雀躍しつ姫が周圍に打集ひて王の遺言に從ひて王位に即き給へと勸むされど姫は王位てふものに伴ひ來るものは平和無事の時すら安樂幸福にはあらで重き責任と深き心勞の他なれば況して戰國の時にはとおぼし中々に承諾ひ給ふ御氣色見えず又姫は身は萬乘の位にありながら心は常に憂苦不安心の內に一生を終りし王や女王の例を引きて願くは我身ばかりは同じ憂目に遇はせで許させ給へと淚ながらに人々に乞ひ給へり實に姫は其後御身にふりかゝりし凶事を此時より先見し給ひしかと其に至りて人々の怪しみしまで王位を忌み嫌ひ給へり然れど利己てふ魔神にとりつかれ心暗みたる姫が親屬等は姫が歎願を耳にもせで王位てふ榮譽を身に受け給へと益々迫りて止まざりければ姫は辭まんよしなく遂に彼等の思ふがまゝに任せ給ひしこそ是非もなけれ

レデージェン、グレー即位ありて僅か九日を經てチユーダル家のメリーは非常なる權勢を示してロンドン市に向て進みつゝありとの風聞國中に傳はるや人心は一時に動搖せりジェングレーの御名は一般に敬愛せられしが又メリーこそ正統の繼嗣なりとは誰もいなみ難き事實なりき因て人心はメリーの方を王に戴かんと一致せり

メリー女王即位あるやジェン姫ノーサンブランド侯ロード、ダドレー皆獄に投ぜられたり此時こそ舅ノーサンブランド侯が醜陋卑劣なる心根と姫が卓越非凡なる御品性とか現はれし機なりき

ノーサンブランド侯は卑劣にも己が從前奉じ來りし新教を捨て、羅馬教に歸依すべければ生命ばかりは助けて給はれと只管メリー女王に乞ひなほ以後は如何なる賤しき僕の位置に婦さるゝとも反抗などなさず最も忠義なる臣下たるべしと誓ひぬ是に反して御年齒未だうら若き姫は不慮の禍に毫も取り亂し給ふ色見えずいと平穩に憂目を忍び御身の上を天命に任せ給ひしは賢明なる哲學者とも眞の宗教家とも云ふべけれ姫が平常鍛ひ給ひし克己心と高潔なる精神とは此の時一層の光輝を放ちぬ暗憺たる獄裡も姫が高き御德に輝され潔められては華美を盡せる宮殿も中々に其麗しさには及ぶまじと思はるゝばかりなりき

千五百五十三年十一月十三日空は一面に曇りて天地慘憺たりし日ジエーン姫と其夫君は反逆の罪人としてギル

すところを知らざりき姫は此時種々なるやさしき御言葉にて人々を慰め給ひければ皆々感淚にむせびけり姫は再び獄に連れ行かれ給ひぬれば夥多の人々は姫の後に從ひ來りて其薄命を悲しみければ姫は彼等を顧て宣ふやう嗚呼妾が不幸の時の好友よおん身等かく妾に同情を表し妾が爲め歎き給はゞ妾が悲しみは一層增し加はらんそも艱難辛苦を嘗め又時としては身に來る恥辱をも忍ぶは我等此世に生れ出しもの丶役目にてはべるかし又罪なき者壓制暴力てふ者に苦められし例は古今に多くあるぞかし

ロードダドレー、レデージエングレーは千五百五十四年二月九日死刑に處せらるゝことゝ定まりぬ

ングハムを始めとして數多の僧侶等はかゝ

はす姫を空しくなさんことはいと惜き事と思

かして姫を羅馬教に改宗させ其御生命を助けんぞ

[illegible]に至りては言葉を盡して姫に說けりされど生

を惜みて己が信仰を翻し給ふ姫に非ず彼等の説くところには中々服し給ふべきも見えざりき漸々御臨終の期も近づきぬれば姫に取りては一分の間もいと貴重にして用なき談話に費すべきにあらざるに僧等は姫が御心をも察せで己が田へ水を引く議論をいと長々敷述べ續ければ姫が迷惑一方ならぬも能く忍びて其を聽き又其に對して一々答辯をなし給へり其答辯は皆道理に適ひて議論奥妙なりければ堂々たる高僧等皆驚嘆して口を噤むに至りしといふ旣に時刻も迫りぬれば姫は靜かに聖書を讀み祈禱を捧げんため暫時獨り居りたしと乞ひけれど頑迷不遜の僧侶等はなほも姫が信仰を跌させんものと遂に最期まで御傍らを去らざりきされど其甲斐はなくて遂に岩の如く堅き姫が信仰を毫も動かすこと能はざりき

姫死刑に處せられ給ひし前の夜かねてより大切に所持なし給ひしギリシヤ語の聖書を讀み終り其中に二三の愛深き御敎訓を記るして妹君に贈り給へり

姫が囚はれ居給ひし城中の次宮に姫が凡人にておはさぬを悟りて姫を敬愛し所々慇懃にあしらひければ姫は其深切を謝し給ひて一冊の書物又英、ラテン、ギリシアの三個國の語もて左の如き味意の詩を記るして與へたまへり

神我等を助け給はゞ怨恨の齒我等を咬むも傷け得じ
神我等を捨て給はゞ我等の勤勞も空し
我暗黑去りて光明來らんとの希望を有す

二月十三日茜さす日はさし昇りて空の景色いと麗かなりしも英國中は悲哀慘怛の情もて滿されぬそは此日ロードダッドレーはロンドンタワーに於て斬首せられ給ひ一時間を經てゼエン姫も同じ刑場の露と消へ給ひたればなり此御兩人最期の際にいま一度の會見を許され給ひしも姫は一度相見て相互に言葉を交はして後は愛戀の羈絆一層斷ち難く復の離別の苦は忍ぶにあまりけ

ん果敢なく會見をなさんより寧ろ此まゝ相果るにしかじとおぼし遂に其特許をすて給へり

ロードダドレーが刑場に曳き行かれ給ふ途次姫が獄の前を過ぎ行き給ひし時姫はこれが此世の御姿の見終なりと窓より打覗りておはせしがダドレー君にも又姫の方を振りむき給ひて互に目と目にて此世の御暇を告げ給ひしも哀れなり

既にして良君の御死骸を載せたる車の轢る音しければ待女等は姫が御心の苦痛のあまりに激しからんことを氣づかひて止め參らせしも聞き入れ給はで姫は忽ち窓に走り行きて叫び給へり嗚呼我君よ君と妾がもろともに今日より天にて味ふべき幸福快樂を思へばこの恐ろしき刑戮の苦痛も妾が皮肉は戰慄せしむるに足らし花の蕾の御容顔露をも厭ふ御風情にて姫はつゆおち恐れ給ふ御氣色なく刑場さして除ふと歩を運ばせ給ひながら傍らに姫が御有様を見奉りて悲歎に沈み居る人々を慰め又それ〳〵御紀念の品等與へ給ひなどして其美しき御首を斬首臺の上に据かせ給ひし時まで姫が剛氣はつゆばかりも衰へざりき遂に姫はいと沈着きて手捜しつ良君の血もて濕ひたる殘酷なる臺の上に花の御首を除かに置き給ひて神よ爾の御手に我魂を托ぬと祈り給ふや太刀は閃きて姫が御魂は天つ御神の御許に立ちかへりぬ實に姫は此時御芳齒僅かに十六才にておはしき

レデージエン、グレーはいと短命にておはせしも其御精神は萬世の後迄も傳へられ其感化力は永遠にほろびざるべし誰か此姫の純潔善美なる御生涯に感ぜざる者やある此世にて敬神善行柔和忍耐てふ諸德の崇められん限りは姫が芳ばしき御名は賞賛せらるべし

百づくし



百花繚亂

男明日は〳〵と思ほえつゝも雨のみ降つゞきければわ
びて、例の友のもとへ
　今年程袖ぬらさめや春毎に
　　花ゆゑ雨はいとひつれども
といひやりければ、かへしとはなしに
　いたづらに咲てちらなむふる雨に
　　ぬれて花とふ人しさらねば
花やかくもうらみなんと、せめしに男くやしとや思ひ
けん、ひと日おきて文に九日と思つるも、待あへすて
八日の午過る頃より立出ぬとて
　清見潟三保の松原あす見んと
　　思ひおき津に宿はかりけり
といひやれり、友は今更のやうにうらやましうもある
か
　清見潟三保の松原君や見ん
　　われは千歳とわひつゝそふる

文藝

吉野たより

桐廼舍女史

何れの里にかありけん、みやひ男住みけり、家居のさまも心にくきまでをかしけに、園なともいとひろらにて、ありとある木草植えためたれは、花てふ花の香の絶ゆる時なく、いつも〳〵此園に遊べはさなから、春の心地すとて此男の、名におはして人皆春園のあるじとそ云なる、此男今年はいかで吉野の花見むとて、親しき友かり、しましの別れつけんとて、音すれしに友は白き絹とう出て

　吉野山わかぬ櫻のいろも香も
　　すゝみて來ませわれ待居らむ

とはしり書したるを、おくりてうらなき袂を別ちぬ、

とひとりこぢぬるそあわれなりや、又ひと日おきて男

春も花もやがてをはりの瀬戸とへば
物うかり音に鶯のなく

名古屋とのみまるしぬ、友はかへしせむよしもわらねは

鶯のなくはわれそも春も花も
をはりの瀬戸の君をこひつゝ

とてうちなきぬ、旅なる男は花紅葉をめつるのみか、すき人とさへいふめれば、假寢の夢のかよひ路にも、君や來しわれやゆきけん思ぼえす、とやうたふらむと思ひやられしも、さすが都の友はわすれざりけり、また十四日といふ夜かたくひきむすびたる文友のもとへとゞきぬ取手もおそしと、とく/\ひらき見れば花ひとひら、こぼれ出ぬわなゆかしの香や、いつらの花ぞと見れば

幾春かかけて匂へるいにしへの
奈良の都の花ぞこの花

とのみなん猶後のたよりには

吉野山花の中道わけ行は
雲井にのぼる心地こそすれ

とて散るまでは此山に籠りゐて、古き跡もたづねんと思ふに、萬は花づりの衣重ねかへらむ日にこそ語らめとあるに、わびはてぬる友はねたくもまた嬉しとや

百づくし



百まなこ

田園雜興（四）

童僕　不二行者

家室庭園の灑掃、雞群の飼養、さては日常の用務の小

价として十三なる童兒を家庭の中に加へし時ありき。」

童が家は先代より鍛冶を業とし、何鍛冶と稱呼さるゝ程なりしを、その父に至つて家業を嫌ひ若きより道樂三昧、中年と成りて爲すべき職業の素養無きに、やがて車夫となりぬ。此社會の慣として飲食に費を爲し、貯蓄の念無く、今日の存在のまゝに世を渡りゆくが常なるに、加へて兩親ともに、所謂牛馬の子煩惱、氣隨氣まゝに童を育て、近き僧家に通はせて假名文字を蚯蚓形に記し覺えさせけるが、それも長くは爲せ得ず。可愛い子には羇旅をさせよといふ俚諺もて、店奉公を勸むる隣家の翁の言をも用ゐかね、兎角家より離し難きまでに、童の愛には眼無きものから、父なるもの或時同業の集會の席に、何事かに依りて文盲の耻を知り、俄に童に文字覺えさせたく、さりとて學校に通はすことも成り難しとて、さては「彼」が家人となして、晝は其務を爲し、夜は文字を知り智識を得べき望なりけり。

冬なほ寒き頃なりき、唐棧の赭縞なるを、羽織ともに筒袖に新裁したるを着、絹絨の緒すげたる雪駄新しく、唐縮緬の兵兒帶を廣く胸高にしめ、四折の鼻紙その懷に藏め、帶に挿みし手拭の疊まれたるが羽織の陰に半ば見ゆる服裝して、周旋する翁と共に伴れたちて來りぬ。

顏圓く眼細く眥の少し後拖きたる、鼻は高からざれど唇の薄くて一文字に結び勝なる、眉の細く鮮かに、眉間の際だちて秀でたる、童の顏貌は敏かるべき風采なりき。

此日より童の境界は變りたるなり。朝夕不羈に近隣の童輩とあくたれ遊び歩きたるが、今は主人といふ牽制者を戴き、親ならば嫌厭なりとて濟むべき用事も、今は辭拒み難き境界となりぬ。されど元來閑居の家庭には童の厭ふべきやうなる務あること無く、主たる「彼」

はもとよりまた一箇の小友を得たらんやうに遇ひければ、昨日まで見ざりしを見、聞かざりし事を聞き靜に平和なる家庭に入りたる童はやがてその好奇心を充たして、奴僕といふ不自由は忘らるべき程に見えけり。」近所評判の悪太郎なり、他家に務めむこと一日も難かしからむど、出入る人毎に告るものありしが、さる擧止無く、却て怯懦にして小心に、しかも丁寧なり。但範圍の定まりし事に對しては、勇ましく活潑に粗豪に、惡太郎の本領を顯はすなり。所詮性來感情に富み神經の過敏なるが養成法に依りて一種の性行を形成れるなりき。

童の知識見聞は甚だ狹く低く、聞く毎に眉を顰し色を動かして驚き、さては奇問をもて人を笑はす、此故よりしてか、擧止に滑稽多く矛盾あり。

一日の勞働なる拭漱掃除使价の務を終へて、小さき文庫机を取り出し、禿筆を握りて角多くなりたる墨にと。ら石の硯を磨り、殊勝氣に字を書し帳を繙く時、

「如何だ、おれの家へ來て、恁麼な心もちがするか、自家の母親の傍がやつばり好いだらうな」、と言へば、

童は「えへ、」と羞かしげに笑みて、「此方が餘ッ程好うムいます、種々な珍らしいものが有つたり、旦那さんの話が面白かつたりしますから、」

「左樣かな、汝は大人に成て何にならうと思ふか」

童はその眉を顰め唇を動かし、怪訝顔なり。

「汝がな、大人に成つてから、商人に爲つて財を儲けたいか、それとも父親見たいに車夫になりたいか、それとも鍛冶屋の職人になるのか、百姓になつて鍬や鎌なんか擔ぎたいのか如何だ、」

童は直に口を開き「えゝ、鍬や鎌なんて、嫌です、百姓は嫌です、商人が一番好うムいます、」

「左樣か、それでは商人は大儲を爲たいか、それとも チビ〳〵損を爲ないやうに少しづゝ貯めてきたいか、

孰ちが好いか、」

「儲かつたつて損を爲ちまつてはつまりませんから、少しづゝ貯まるやうにして、親爺を護てやる方が好うムいます、」

最後の語は「彼」の心を動かしぬ。童の親を思ふことは淺からざりしなり。

かゝる日夜の物語に童の性質は漸く著るく、悪太郎の擧動は依然としてありながら、なほ童心の無邪氣滑稽など如何ばかり家庭の一樂となりけむ。

春は櫻に桃に花麗しく、蝶舞ひ鶯歌ひて、心も空に浮く田園の宵、花の香に醉える如き半輪の月、軒の梨花を照し、輕風緩く吹き渡りて和氣胸を蕩かす。童もまた春の美しきに化せられけん、怡色面に溢れて「好い心もちの夜ですねえ、旦那さん、月が出ました、今夜の月は西瓜みたやうです、」

童の眼は蒲鉾形に切りたる西瓜の形と色とに親めるより、その胸中の美を稱ゆる言葉は其の外に出でざるなり。やがて種々の物語に家庭の喧嘩を増しけるが、壁にたてかけたる竹刀に眼をとめて、「旦那さん、……劍術をやつてくださいまし、敎えてくださいまし、」と頻に促し請ふに、端りなく興催されつ、やがて半輪の月下、雪の如き梨花の陰、頭重げに鐵面被りたる丈高きと低きとの兩箇の影は地に描かれたり。

童は懸聲おかしげに竹刀を亂暴に振りまはしつ、面となく胴と無く腰となく「彼」を亂打するものから、小さき腕はやがて疲れゆき、はゝあと溜息つきつゝ、急ぎ鐵面を脱ぎ、さも苦しげなる面地に、「あゝ恐わかつた、小童や旦那さんに殺されるかと思ひました、」其顏と其語の調子とは覺えず人を笑はしめたり。「今一度やれ、奮發しないか、」と戯れ促せば、「もうだめです」とやがて道具を納め終れり。かゝる折は童の無邪氣なる滑稽なる殆ど悪太郎とは別樣の觀ありき。

童は人に笑はるゝ時は常に塊ぢたる容をなしぬ。如何なる故ぞと問へば「何んだか羞かしいやうです」といふ、男兒が羞かしいなどいふものならずと敎ゆれば、「左様ですかねえ」と怪色顔なり。

童は心よく熟睡せる時も、戸の響なんどせば身を動かし夜着引き被りて頭をうづむ。攪眠時計の音鏗々たる時、また同じ。「攪眠時計は眠を覺す爲に鳴らすのだから、汝のやうに夜着に潜りこんでしまつては何んにもならぬでないか、」と言へば、「左様ですかねえ、でも恐わうムいますもの、」と答ふ。

童は金錢の貯蓄には考あれど、衣食調度には更に儉約心なし、こは奢りに馴れたる故にやありけん。雪駄も新しきを穿きたるまゝ泥にまみれ汚がるゝに任せてやがて捨て措き、衣服も古くなりたるはさも厭はしき面地にて着く、食ふものに嫌ひの多く、美味あれば惡食し美味なければ殆ど食はざる時もありけり。

童は心向ふときは大人の爲すべき事務をすら勇み勵みて丁寧に周到に能く働らけど、氣すゝまざる折は、やがて虚僞を衒ひ表裏を行ひ、殆ど終日怠慢に了ることあり。

童はその文庫机に向て筆はとれど、竟に自ら學ばんとせる心を發すること無く、唯禿筆にはかなき形狀さては文字を描き知識を求むる態なかりき、書きたるを示せと言へば、例の眉を顰め打笑みて、そを袖に隱すなり。

惡太郎の性免れずして、志かも羞かしき癖を有するさながら女兒の如き様あり。まことその擧止に晴雨の多きは此童の本眞なりける乎。

童は「彼」に伴ひて畑に行き欵々たる野風に吹かれ、俚歌を唄ひながら豌豆を摘みたることありき。「彼」と共に花を植ゑ樹を移し、さては細々たる小川に、魚を捕へし事もありき。繡眼兒の美しきを飼ひて、優さしき

囀哢を聞きつゝ、そを囮として青雀を誘ひ、鶺を嗛し、鶯を招き、さては伯勞を捕へしこともありき。巴丹杏樹に攀ぢて累々たる果を衣に滿たし、さながら昔昔物語の柿樹上の猿の如く戯むれ遊びたる事もありき。栗、梨、柿、さては棗實を味ひて、「彼」と共に曾てアダム、イブが果實を啖ひたる時の如く天然の糧に飽きたることもありき。午蒡は大根の如く容易に拔き得べからず掘りとるものなるを「彼」に敎えしこともありき。花香人を打つ時も、月影心を澄ます折も、涼颸に榻に臥する夕、はた雪景に爐を擁する日にも、童は家庭の一伴侶として和樂を添へ興を給したり。

されど、童が家庭の和樂を添へたるを喜ぶと共に、その性行の、雙親養成の影響を、深くも腦裏に刻みたるが、容易に變じ矯め難きを視て、世の家庭を形成る上に於て、用意の疎漏ならぬことを、更に一層深く學びける。

童は今歸りて其家に在り、柔かき腦裡に浮べる小商人とならむといふそが考は、如何になりゆくべからむ。あはれなる童よ。

百づくし



雀百まで

飛鳥山記行

茂川千種子

世の春に先立て霞棚曳空をあふぎては。そゞろに花かとまどひしも今ははや。何處をとはず花のうはさのとり〳〵なるに。吉野の山はかけてもいはじ飛鳥のあすかの山には。いかにかしてゆいて見まほしきと思ひつる折しも。いぬる十二日は空のけしきいと長閑けきまゝに心あひの友と共に小車つらなめて。志す上野の停

車場に至れば誰れも〳〵同じ心にやあらむ。にぎはしさ大方ならず。やがて午後二時といふに汽車は出ぬ言葉は無て。左見右見つゝあかぬ間に田畑を越て王子と呼聲に。おり立て飛鳥の山に登りつゝ見れば今日しも花は真盛りにてありけり

飛鳥の山をのぼり見れば今日しも花は盛り成けめなとひとりごちつゝ咲つゞく。花はさばかり多からねど實に白雲のおほひたらん如。見ゆるもおかしそこはかとつどひ立てる人はあれど。いと心やすう花の本を眺めらるゝ事の嬉しさに

　世のうさもおのが家路も忘られて
　　花の盛りを見るぞ嬉しき

嬉しさは何にたとへん世のうさも
　　さけて櫻の花をし見れば

猶あかで佇むを連なる人の道灌山はさらなり日暮の里の花をも見ばやとうながし立つるに。いなみかねておたがひ行ぬ道の程はかりしよりも遠かりしにや日暮の里に入りしははや。黄昏頃となりけりここも花は盛り成ければ心いそがれつゝも見て

見れどあかぬ花のほつ枝につれなくも
　　うす雲そ立日暮の里

うす雲のかゝれる花をはた今日の
　　名殘とや見む日暮の里

家路のいそがるゝに。竹の臺。櫻が岡しをもよそに見つゝかへり來にけるぞいと〳〵あかぬ事になむ

百づくし



百臨

談叢

狐のレイナード（五）

勝間禪夢

圖太いレイナードが今度こそ本當にグリムバートに連れられて來たといふ事を聞込んだ時は、禽獸社會に評判高い事件のことゝて我も我もと皆な法廷に押懸けたから、廣い廷内も粟粒程の空地さへ無い許に傍聽人や見物人が群れ集つて、殆ど呼吸も窒塞する位であつた。

レイナードは獅子が己の罪を數へ上げるのを默つて聽いて居ましたが、軈て尤らしき身振と仔細らしき言振で毫頭もさういふ覺えは無いと飽までも自分の無罪を辨護して白状する樣子は無かつたが、

レイナード貴樣は中々辨説が上手だの、だがその分疎は最早遲い、最早遲い、斯樣いふ證據があるが、これでも何うぢや。

と獅子に睨めつけられて犯罪の證據物件を目の前に押し付けられた時は、流石のレイナードも一言半句の答へさへ出來ずに首を下げて仕舞つた。

獸王はそこで愈々狐を有罪と決し、黑い法冠を被つて（宣告をする時の儀式であるから）絞首の刑を申渡した。



レイナードがそこで直ちに荒繩で綾十文字に括られ、刑場に引ずられて行くあはれの樣を見て居た、貉のグリムバートは親族のことゝて哀しさに堪え切れず、如

何に罪が重いと云つても死刑とは酷過ぎると思ひ、獣王に再判を嘆願したが、獅子は國法動かすべからずと言つて此の請願を却下して仕舞つた。

熊のブルインや狼のイスグリムや又猫のヒンズ等は、日頃の怨敵今日こそ退治と喜び合ふて、寄つて群つてレイナードを捕まへ、絞首臺の方へ追立て追立て連れて行きました。



皆な用心しろ、縄を弛めちや不可ぞ。

とイスグリムは叫んだ、そしてとう〳〵彼を絞首臺に乗せて、首の周圍に縄を掛けた、獣王の獅子も獣王の妃も、貴きものも賤しきものも、鳥も獣も皆なレイナードの死刑を見やうと絞首臺の下に集つて居ます。

今や死刑の暗圖をレイナードに與へやうとした時は、流石の彼も萬事既に終はる絶望の身を悲んで泣いて居たが、何か考へ出した事でも有つてか、

閣下、私が最後の願にちと申上げて置きたい事が御坐いますが、御聞き下さる譯には參りますまいか。



と獣王に向つて言つた、獣王は呻る樣な聲で、

ならん、ならん、そんな事はならん、今に成つて未練がましいことを拔かしたツて最早駄目だ。

と怒鳴り、レイナードが最後の願さへ許して遣ら無いから、彼は百計盡き果て、如何とも爲難き悲しさに聲

を揚げて泣き出した――此時の淚は實物であつた。レイナードが頬邊に實物の淚が瀧の樣に轉がり落つるのを見て居た鳥や獸は、急に愛憐の情を起し、彼の不便なる狀態に堪え兼ね、中にも心弱きものは窃かに貰泣を爲て居た、それ故彼等は獸王に特別の憐愍を以て彼の願を許しやらんことを一同嘆願した、そこでレイナードも大に力を得、

何卒、唯た一言いはして下さい。

と泣聲ふるはして賴んだ、頑固の獅子も遂に此の言葉のあはれなるに引かされ、脆くも彼の願を許した――實にこれが後の害に成るとは知らないで。



レイナードはすがるべき一條の希望の綱を得たのに喜び、有る程の虛淚を誠らしく出し、言へる丈の虛言を尤らしく並べて、己が尻尾の樣な長い話を始めた。

私は善をしても不善といはれるし、忠をしても不忠と譏られるし、私程因果のものはありますまい、閣下は私を一圖に惡僕と思召す樣ですが、私は決して閣下の國を荒らして閣下を苦める樣なことは毫頭致しませんのみならず、起て働くにつけ、寢て休むにつけ、寒いにつけ暑いにつけ、雨につけ晴につけ、一日も閣下の國を憂ひ、閣下の身を思は無いことは御在ません、何がな閣下の御恩に對して酬ひられる程の大功を建て閣下の御譽めに預りたいと心掛けて居つた爲め、實は無類飛切の寶物を見付け出したのです、折あらばこの寶を献上しやうと思つて居ました處、計らず今度の災難、實に何うも此程殘念なことは御在ません、嗚呼天道は是か非か、地に日は照

らし給はぬか、私は素より虫介同様の者、絞首臺の露と消ゆるも更々厭ひも、惜しみも致しませんが、私が死すると共に天晴名寶を長く地中に埋めて朽ち果して仕舞はなければなりません、實に遺憾で堪りません、此許が此世の思ひ殘で死なうと思つても死きれません、何卒閣下、此上の願に二月の命を私に御借し下されうなら、私はその寶を閣下に献げて、直ちに鮮よく往生を遂げる積です、ですが御許なければ已むを得ません、あゝ實に惜しい寶だ……。



これを聞いた獸王は狐の言葉を半信じて半疑ひ、暫くは一の心が右に左に彷徨ふて居ました（これが本當の狐疑といふのです）が、軈てレイナードを見向き、

寶を見付けたと、どんな寶を見付たのだ、私の國に今迄そんな寶があるなんぞつていふ事は聞いたことが無い、石塊でも持て來て私を欺計る積だらう、一躰何處で何んな寶を見付けたのか、もう一度明瞭と言つて見ろ。

と言つた、レイナードは少しく獅子の顔が弛んだのを見て、思ふ事圖に當れりと喜び――併し顔色には出さないで――此處ぞ今一息と言葉にまで力を入れて、



閣下、眞實です、全く見付け出したのです、和氏が百璧の玉もこれには中々及びません、素敵な物です……私も始て見付た時は吃驚して目が廻つた位で

す、何でも夜中ピカ〳〵光る玉です、彼奴の名前は何と云つたつけ……あゝさうだ金剛石といふので御坐います、今ぢや金剛石が寳中での王だと申す丈、そりやお寳に寄麗なものです、あゝさうと去年の夏でした、女房と一緒に野原歩をして居ますと、横の方でピカと光るのです、何だと思つて手に取て能く見ると、それがその尊い寳で御坐いました、そこで考へつきましたには、若しや此儘打捨つて置いたなら、犬の畜生が掘ぢくり出すか、烏の野郎が掠つて行くか知れませんから、女房の手を借り一生懸命に成つて人の知らない場所へ夜中運んで埋めて置きましたが、何卒善い機會を見付けて閣下に献上しや



うと思て居たので御坐います、これから二月も掛れば閣下の御殿に悉皆運ぶことが出來ます。

と始から終まで少も事實に無い事を口から出任に多辨ましたが、獸王は寳の欲しさに僞らるゝとは知らず、一から十まで眞に受けて信じて仕舞ました、併し多の鳥や獸はレイナードの言葉を眞實と思はないから、皆な彼が度胸の惡く太いのを怒つて居るもの許であつた。



此時獸王はレイナードの縛を解かしめて、

あゝ、私が惡かつた、私が御前を見違いたのだから、お前には少も罪は無い、もうお前は晴天白日の身だ。

と言つて彼の罪を悉く許して絞首臺から助下したが、尚それのみで無く彼を己が舘邸に招いて晩餐を饗しそして彼に寶の在所を尋ねた。

私は閣下に寶の在所を詳しく御話申しませうが、實は何です……餘程遠いのです、そこへ參りますには坂道を傳て十五里も行くのです、そして衝當つて右に曲るとクレクルポンといつて極く淋むしい村に出ます、此の村の外端にある洞穴の中へ、本當にその寶を納つて置いたので御坐います。



といふ狐の答に獸王は暫く考へて居ましたが、遂ぞ是迄クレクルポンなぞといふ村は聞いたこともない名ですから、不思議とも思ひましたが、それさへ深く疑は無いで明日にでも自らそこへ出立しやうと言つて再び語を繼ぎ、

だが、お前も私と一緒に來て呉れて道案内を爲て呉れると萬事に都合が善く行くだらうから、さうして貰いたい。

と彼に同行を賴んだ。



閣下、どうぞそれ計は御免蒙りたう御坐います……何故と申して私は閣下の慈悲で死ぬべき身を助けて戴いたので御坐いますから、閣下への御恩報じの爲め又た諸佛を供養の爲め、行脚の僧と成つて廻國修

業致したい志願で、實は今夜から急ぐ發足しやうと思ふので御坐います。

と言つてレイナードは獅子と同作するを拒んで暇乞を請つた、獅子も強いてその旅立を引止む譯にもゆか無いから、已が侍僧の羊と兎の二獸に命じ國境まで彼を見送らした。

軈て國境に着いた時、レイナードは羊に向かつて

どうも御苦勞でした、もう御出で下さらんでも宜しう御坐いますから、これでどうぞ御歸を願ひます、甚だ恐入ますが此の袋には大事の書狀が入れてありますから、何卒この儘獸王閣下に御渡下さいまし。

と言ひながら大きな重い袋を手渡して東西に別れた。羊は連の兎が見えなくなつたのを大層氣を揉み、種々方々を尋て見ても影さへ知れないから詮方なくも元來た道を已一人で歸つて行つた。

水の靈

湖處子

もとより十二分の收入があるといふにはあらねど、食ふには何の差し支ゆるともなく、可なりに繁盛して居た粉屋。此頃はどうした運の廻り合せやら、メッキリ客足が止まり、日に日に店はさびれゆき、早其日の暮も覺束なしといふあはれな有様、況して明日のことを思へばいとゞ心細く、胸は張り裂ける樣な心地が、したかせぬかそれは知りませぬが、主人は嘆息つぐ〳〵我家を出てまいりました。

まだ露ふかき朝のことて、吹き來る風も心地よく、結ぼほれたる主人の心もいつしか解けて、思はず仰ぐ東の山より、早くも太陽が其半顏を現はして居ます。さらく〳〵と滯りなく流るゝ水の、今日は我を呼び留むる樣なる心地するに、ふと顧みれば、深碧鏡の樣なる湖の中心に、美しき天女の姿、半は日光を浴び、半

は水霧につゝまれて、佇立ています、水の靈とはこれであります。

天女は聲をかけ、

こや男、汝は何を思ひ煩ふてか、

主人は優しき言葉のいとゞ嬉しく、今日にもせまる身の難義をつゝまず打明けました。

主人よ心安かれ、もし汝が生みの初子を妾に與へんとの約束違へずば、妾はそなたに富と幸とを得させん。

主人はいたく、欣んで其約束に從ひました。

水の靈の姿はかき消す樣に消えてしまいました。

主人は來るときの心とはうつて變つて、いそ〳〵として歸りました。

家に入らうとすると可愛い赤子の泣聲がする、這入つて見れば玉の樣な而も男の子が生れて居ました。

かういふ美しい兒を持ちながら、これが親の心でどうして欣ばずに居られませう、が主人の父は重き嘆息をつきました。

あゝもう寶も富も何も欲しくない、この兒さへ無事で大きくなつてくれゝばねえ坊や。

ところが不思議なるとには主人は其日よりずん〳〵金を利け出しました、利けるにつれて主人は益々心を痛めるばかりであります。

水の靈がもう現はしないかと毎朝〳〵湖の畔に立ちてながむる父のこゝろは、いつそいつまでも現はれてくれるなと祈つたでしよう。

夜毎〳〵の寐物語には、呉ぐれも水涯に行かぬ樣にと敎へました。

月日は流るゝやうに進んでゆきます、水の靈は其後すこしも姿を現はしません、主人は漸々胸を撫で下しました。

とかくするうちに忰は立派な美少年となりました。

父は砲術見習の爲とてさる所に少年を奉行に出しまし

た。

その村に美しい一人の少女がありました。

少女は兼てより少年を憎からず思ひ、少年も少女を淺からず思ふ心の色にあらはれ、いつ語りよるともなく、わりなき交となりましたを、主人は不憫と思ひ、山かげに小奇麗なる家をしつらひ、そこに二人を住せました。

おぐらき山かげの小家をまたなき樂しき住家として、二人はうれしい月日を送りました。

ある日少年は獵に出かけました、追出したは鹿でした。

鹿は森から野に逃げのびましたが少年はそれを湖の畔まで追ひつめてとうとう撃ち止めました。

血に染んだ手を洗はんとて、水邊に下りたつた其心は獵にうかれて、父のあれほどの戒も忘れ果てた少年、何心なく手を水につくるより早く獅子の様な大浪は一呑に少年を呑んで行きました。

慣れなは若き妻の身上で、昨日も今日も待てども待てども夫の歸りのなきに、胸の痛めやうは一通でない。

少年は水の靈との約束をとり／＼妻に話してゐた、妻はふとこゝに氣がつき、もしやと思へば身も世もあられず、夫を尋ねて其家を漂ひ出ました。

漂ふうち湖のほとりに出ましたので、聲の限り夫の名を呼びましたが、答ふる涙さへありません。水の面は鏡のやうに滑かで、片輪月がほんのりと浮んで居るばかりでありまず。

夜は次第に更けて行けど、あはれなる妻はそこを立去らんともしない。あるときは何にも曰はないでたゞ悄然と、あるときは細き聲にてしきりに何事をかさゝやき、あるときは哭き叫んで夫の名をよびますが、呼んでも叫けんでも何の應もなきに、今は氣根も盡き果てゝ、あはれやそこにくず折れましたが、いつしか華胥の人となりました。

荊棘、茅萱かきわけて、劒の様な岩を踏み行けば、雨は我顔をうち、風は我黒髪を吹きみだす。

漸々の事にて山の頂きにたどりついて見れば、今までとは全然別世界、天は晴れ、日は照り、風は暖かで、そして山のすそ、谷のかげ、皆花で、其花の中に美しい一つの家がたつて居ます。

其家に近づいて戸を開くれば、中には鶴髪の老婆端然と坐つて居る、女をみてにこやかに、何事をか語り出さんといたしましたがそれ聞かぬ先に、あやなく夢は覺めました。

夜は名殘なく明けはなれて、山の端もと日のかげ、早や 湖の上に其弱き光をすべらして居ます。

妻は夢の後を追ふて山に登りました、頂上にいつて見れば四方の景色比し夢と少しも違はぬ。鶴髪の老婆は親切に女をいたはり、徐ろに來意を尋ねました。女け胸にせまる悲しみを涙と共に語りました。

老婆はなぐさめて、

それなら働くまでもなし、老婆はおん身を夫の君に會せまいらせん、この黄金の小櫛をもて月の滿つるをまちてかの湖のほとりにておん身の黒髪を櫛り玉へ。果てなば其櫛を水涯に置きて浪の起るを待ち玉へ。

女は老婆のもとを辭して山を下り、滿月の夜をまちて湖の畔に坐し、敎へられし如く黒髪を櫛り、櫛り果て丶その櫛を水涯に置きますと、不思議や蛍突く大浪一時に起りました。あな怖ろしと見るうちに、其浪、中より二つに裂け、其間より現はれたは戀しき戀しき夫の姿！今は怖さも恐ろしさも打忘れて妻は其浪の中に飛入りました。

やがて浪は靜まりました、若き夫婦の姿はどこへやら、水に浮ぶは月ばかりてあります。

笑ひ草

三鷹子

（一）

或物ずきな老人が、ある日銀座あたりの道具屋にて、口のすぼんだ、底のひらいた、小さな壺を一つ買つて來まして、ねかして見たり、おこして見たり、それは〳〵色々樣々、ひねくりて見れば見るほど、そのなり格好の工合といひ、其色つやの鹽梅といひ、だうも〳〵いひ樣がない、たとへ方がない程よきところに、老人はますます感じて、これはまた、近頃にないよき堀出し物じやと大ひに喜び、我が子の樣に、孫の樣に、大事にかけて撫てつさすりつ、金米糖入れとして、外の茶道具と共々に、そばを離さず、來る人ごとに自慢してこれをほこりて居りました。

或日、例の如く五六人の男があそびに來て、海山の話に、一座笑ひどよめく折しも、老人はまた、例によりて例の如く、かの壺を出して、一同にほこり、さて、此中には、御茶菓子の金米糖がはいつて居ります、皆さま、ゑんりよせずに。澤山たべて下さい、と、いひますと、いづれも其壺を見て、これが、かねて聞き及ぶ御秘藏の壺で御座るか、誠に格好といひ、色つやといひ、實に外にはありますまい、天下一品とは、この事で御座りませうなど、だれも彼れも、詞をつくしてほめそやしますと、老人は、さも嬉しさうな、滿足らしき顏をして、たゞにこ〳〵と笑ふて居ました、一同の中に年若く、然かもきつさうな男が、なる程立派な壺だといひながら、中へ手を入れて金米糖を出さうとしましたが、ハテ何うしたのか、安々とはいつた手が、急に拔けなくなりましたから、其男はいふも更なり、一座の人々、何うしたものかとおもひわづらひ、色々手をつくしましたが、だうしても、だうしても、其手は拔けさうにも致しませんから、いづれもは大弱り、

話もとぎれて、各々顔を青くしました。

すると、其時其座に居た、ものしりらしき一人の男が、エヘンと一つ咳をして、さて各々にむかつていふ様、昔し唐しに、司馬温公といふ人あり、其幼き時、多くの友達と遊んで居しに、其内の一人誤つて水瓶の中に陥りたを、多くの外の子供等は、あれよあれよと騒ぐのみ、なすこともなさでのみありしを、流石は千歳に名を知らるゝ程の人だけありて、何ともいはずあたりなる大きな石を拾ひ來り、瓶を割りて助けしといふことを書物の上に殘つて居る、丁度これがそれに似て居る、成程壺は大事の壺、なれども人間には代へられぬ、温公が瓶を割りし時の如く、今此人を助けんには、この壺を割るより外によきことはないと、ものものしげにいひますのを、一同は聞いて實にもと感じ、やう／＼の事、老人をなだめすかして得心させ、金槌を以て、此大切な、此大事な、我子の如く、孫の如く、撫でつさつりつ側を離さぬ、壺を割つて仕舞ひました。

壺が、割れた音のきこへた時、老人はワーッと聲をあげて泣きました、それも其筈のこと尤もです、決して無理ではありません。

さてその抜けなかつた手は、全躰どうしたのかとよく／＼見れば、抜けなかつたも道理です、手に能ふだけ金米糖を、澤山握つて居ましたとさ。

（二）

まづ或ところに、一人の男がありました、この男は常ふだんから、悪魔だの、鬼だのといふことをすべて信ぜず、易者だの、まじなひだのといふこと、少しも信ぜず、一にけなし散らして居ました、ところが、如何いふものか、段々にびんばうして、今は四面も、九面もならぬに扨ては、悪魔どもの、おれを悪んで、こんなに貧乏さすのではあるまいかと、だれしもあること、ふと迷ひ初めました。

すると急に、悪魔だの、鬼だのがこわくなつて、をつかなくなつて、たまらなくなりました、そこで急に、易者のもとへゆき、さてだうしたものだと尋ねますと、常ふだん、易者などをわるくいふて居た男のことですから、易者は、今こそコイツをどかしてやらんものと、屑にかさかけて大袈裟に、色々なことをいふておどかしました。

易者におどかされて、青くなり、して易者さん、だうしたら、イヽでしやうときヽますと、易者はすました顔をして、それは私しの力では及ばない、山寺へ行き、法印さんにたのんだらいヽでしやうと答へました、それではと、早速山寺へ行き法印さんに逢ふて委細を話し、さてだうか法印さん、よろしき法を教へて下さい、貧乏せないまじないを教へて下さいと、なきながら頼みました。

法印は、よろしい／＼といふて、長いうたの樣なものを書いてやり、これを毎日々々聲張りあげて歌ひながら、家のまわりをまわりなさつたら、屹度です、請合ひです、貧乏神は出て行きますと、教へられましたから、彼の男は嬉しがつて、大急ぎで家にかへり、毎日々々おかしな聲を張りあげて家のまわりを、まわりますから、家内の人々、近所合壁のだれもかれも、皆おかしがつてこれを笑らひ、これをひやかしましたけれども、彼の男は少しも氣にかけず、平氣の平左で毎日々々、歌つて居ました。

すると、或日の夕暮です、彼の男の歌と共に、やせこけた、色の黒い、然かも破れた着物を着た、鬼のやうな物が、何處からともなく出て來ましたから、心地わるく、おそろしくも、やつと我慢して、聲たかく、そこへ來たのは何物じやといひました、其聲の下、おれかい、おれは貧乏神じやと答へました、さては貧乏神め、手前、おれの歌ふのがコワイから逃げて行くのだ

らう、といひますと、ナニ、アンマリおかしいから、朋友をよんで來て一處にきくのだと答へましたとさ。」

《三》

或何とやらいふ大名の、若殿樣が、近きころ一ふりの刀を御買ひ上げになりました、持て來た刀屋の爺父は請合つて石でも、鐵でも銅でも、この刀にむかつてはたまりません、豆腐同樣、一たまりもありませんといふた、けれども、實際は如何だかいまだ判らない、だうか、これで試めし斬がして見たいが、何處かに、斬つてもよい人間はあるまいか、だうじや、手前達、知つては居ないかと、おつきの人々に、とんだことの御たづねです、一同は、一向に存じませんと、御答へを申し上げると、若殿は、さも御不興のおもゝちにて、何處かに、一人や二人、斬つてもよい人間がありさうなものじや、全體手前達、日頃の心がけが足りないから、判らないのじや、早速何處かで見付けてまいられと、主命ですから仕方なく、一同さがしに出て行きました。

城下はづれの川の土手に、年よりた乞食が一人寐て居るのを見つけ、早速まかりかへりて、このこと若殿に申し上ぐると、大喜び、其日夕かたから僅かに一人の從者をつれられ、其川の土手へ御出になり、よく寐て居たる乞食を胴斬りにして御かへりになりました。

一同を集めて若殿は、鼻高々と、だうもよく斬れるよく斬れる、こんなによく斬れるとは思はなかつた、百兩とは、決して高くない、中々立派な刀じやといはれますと、一同口をそろへまして、それは刀がよろしいのではなく、全たくは御前樣の御手が、きいて居ますからで御座りますと、ほめそやしたてました、すると、若殿は、大々得意で、兎も角も一同、皆來ておれが斬つた手ぎわを見よと、ぞろ／＼一同をひきつれて、土手の處まで、乞食の死骸を見に行きました、多くの人

の來る足音に、死骸もむつくと起き上がり、又たおれをたゝきに來たのかと、大きな聲で、動鳴りましたとさ。

百づくし



百聞一見

小説

なさけの杯（上）

松ケ枝女史譯

可愛らしい手を眼に翳して山を繞る細道から遙か彼方の谷間まで切りに眺めて居る少童、彼の後方には山小屋があつて、困窮と寂寞の印象は充分明かであるが猶何處となく注意と滿足の樣子が顯れてある

少童は暫時見つめて居たが遽に家の側なる物置に走せ入つて棚から錫の杯と鐵葉の手桶と蓋と白布とを取り出して其小屋の傍に湧く泉へ急ぎ行き手桶に冷水を一ぱひ充たし蓋を固め白布で卷いて自分の腰に結び付け、一散に山の細道を登りかけた自分の職務を勉むる觀念の喜びが溢れてか少童の顔は輝いて見えた

彼は先刻眺めて居た場所に行つて見ると一人の旅人が馬から下りて草の上に仆れて其顔色の蒼さ物凄い程で、疑もなく炎天長途の疲勞に打ち負けたのでありましやう

少童は杯と桶とを腰から外づして暫時立つて居た、未だ與の小兒だから如何にその場の處置をしてよいかと思案に暮るゝやうであつたが思ひ切つた樣子で旅人の傍に進み寄り靜かに頭の下に手をさし入れて「おぢさん、起きなさい、口が渇いてるでせう、おぢさん、

起きなさい

旅人は五月蠅と鬱陶氣に小言を言ひながら少し體を動かして靜かに眼を開けば、傍には見知らぬ少童が莞爾として我口に冷水の杯を捧げて居る、嗚呼此の冷水、實に千金にも代えられない、旅人は忽ち一息に飲み乾して漸く蘇生した思をなし、起きて路傍の古木の幹に腰をかけた

「お前は何人だ、何處の天使がお前を玆に遣つたのだらう、私が今來た道は人も獸も通りはしない、私は出る事が出來ない迷宮に蹈み入つたかと案じて居つたがどうしてお前は玆に私の居ることやこんなに渴いて居ることを知つたのだこんなに旨い水はないどうぞもう一杯おくれたゞ見る斗りでも淸々する」

少童は身を屈めて杯を充たして持ち上げながら「あなたは大層疲れておいでだから私が飲まして上げやう」と言ひつゝ靜かに旅人の唇に杯を付くれば旅人は再び水を飲み乾してその愛らしい少さな顏をつくづくと見て「どうしてお前に禮をしてよいか判らん實にどれ程の恩を受けたか判らない」と飾らぬ言葉に誠實を込めつ、外套の「ポケツト」から若干の金貨を攫み出して少童の前に出した

少童は少さな手を背に廻はして後じさりしながら「そんなものは要りません、これは母が「金も價も要らぬ」と呼びなさる杯です、おぢさん、私達は非常に貧乏ですが神は私達にも親切であの家の傍の岩の下に奇麗な泉を下さつたの、母はそれが大層難有いことだつて、あのう聖書の何處かに書いてある「爾等價なしに受けたれば又價なしに施すべし」といふ句を忘れちやならぬと敎へなさいます、だから私はあなたの金を頂くことは厭です、母はこれは「なさけの杯」だと言ひます、だから私達は、誰でもあなたの樣に疲れて渴して居る旅の人に喜んで汲んで上げるのです、そこを御覽よ、

母が何か書てありますよ」と言ひつゝ杯を旅人の手に渡して自分は手桶を取り上げ殘つた水を馬にやつて、桶は空になつたので此度は白布を取つて旅人の衣の塵を拂ひ始めた、「書いてありませう、母が筆か何かで以てそこに書いて下いました私が何時迄も忘れぬ爲めだつて、」

「讀める、キリストの名に依つて愛の務めに」と書いてある、然かしお前、もし泉が湧かなくなつた時はどうするな、」

幼き顏は困つた相を顯はし、忙しい手を一寸止めて遥か向ふの我が家を眺めながら太息をつき「あゝ——泉が湧かなくなつて杯が役に立たなくなつたらどうしやう、だけどねえ、おぢさん、其時はね、迷子になつた人達の案内することが出來るから……でもどうぞ泉が何時迄も湧いてくるれば好いなあ、」

「どうかお前の爲めにそうであつてくるればいゝ」

少童は今や旅人の襟の「ボタン」を直して居たが嬉氣に話を始めた「おぢさん、あなたは杯の話を御存じですか、誰でも多少に拘わらず務めの杯を持つて居るものだと母がいつも言つて聞かせます、世界には澤山あるつて金だの銀だの、それから又私のやうなつまらないのだの樣々あるつて言はれますが定めしあなたのは奇麗でせう、母が言ひますには各々自分の杯を守つて居らねばならないもし杯がよつく磨いて光つて居なければ「務の杯」とは云はれないつてそれから又母樣が仰るにいくら貧しくても富貴でもそれに拘わらず誰でも持つて居る一つの杯があつてそれは……「機……會」と呼ぶ杯だそうです母は私が大きくなつたら、もつとよく了解るやうになるつて言ひますよ、私達はどんなに貧乏でも何か人の爲めにして上げることが出來るつて母が言ひますどなたか悲しんでお出の時、それを思ひ遣つて聞て上げることが出來ますから、あゝ實に私は

杯の話を聞くことが好きです、杯には様々の寶石が付いて居るそうですがその寶石は人の眼に見えないのだそうですよ、何故なればその寶石は忍耐、謙遜、親切、自重、獻身など云ふ名で、そうしてその内でも一番大きくて立派なのは「慈愛」と云ふ寶石だそうです、母は澤山の奇麗な杯があるつて言はれましたから多分あなたの杯も奇麗なのでせう神様は各々に適つた杯を下すつたそうですが私は私のを一番好きな氣がします」と言ひつゝ杯を手に取つて他愛なく撫でながら「私は實にこの杯が好です」



百つくし　百日紅

群書解題

和歌二十一代集　欲東老人

世々の御門の勅を受けて、時の名匠が撰集せる、歌の集を稱して勅撰集といふ、勅撰の沙汰ありて、いはゆる勅撰集たるものゝ、初めて出來しは、延喜年間のことにして、そは實にこれ、先きに我れの解題なせし、和歌古今集なり、されは和歌古今集二十卷こそ、我邦に於ける歌集、いと數多き中について、尤もおこそかなるものといふべし、宜べなるかな古往今來、苟しくも敷嶋の道に遊はんもの、第一にこをいひなすや、其後の代におのづから、撰ばしめたまひたるもの、すべて二十種、これにこの古今集を併せていへば二十一種、卷數殆んと六百餘、和學者、歌學者の、いはゆる

二十一代集とは、即ちこれ等すべてのことなり、今題目のみを擧けていはんに、古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集、後拾遺拾和歌集、金葉和歌集、詞花和歌集、千載和歌集、新古今和歌集、新勅撰和歌集、續後撰和歌集、續古今和歌集、續拾遺和歌集、新後撰和歌集、玉葉和歌集、續千載和歌集、續後拾遺和歌集、風雅和歌集、新千載和歌集、新拾遺和歌集、新後拾遺和歌集、新續古今和歌集なり。

其勅撰の時代撰者とに就て、至極短簡にこれをいはんに、古今は醍醐天皇の延喜五年、紀貫之、凡河内躬恒等後撰は、村上天皇の天歴五年、源順、紀時文、清原元輔等、拾遺は、一條天皇の長德年中、藤原公任、及ひ二三の近臣、後拾遺は、白川天皇の應德三年、藤原通俊、金葉は崇德天皇の天治二年、源俊頼、詞花は、近衛天皇の天養元年、左京太夫藤原顯輔、千載は、後鳥羽天皇の文治四年、藤原の俊成、新古今は、土御門天皇の元久二年、參議右衛督通具、大藏卿有家、新勅撰は、後堀川天皇の貞永元年、藤原定家、續後撰は、後深草天皇の建長三年、定家の子、藤原爲家、續古今は、龜山天皇の文永二年、藤原家頁、行家等、續拾遺は、同代、文永の十一年、藤原爲氏、新後撰は、後伏見天皇の正安三年、藤原爲世、玉葉は、花園天皇の御代に、藤原爲兼、續千載は、同代文保年中に、藤原爲世、續後拾遺は、後醍醐天皇の元亨三年、藤原爲藤、風雅は、光明天皇の御代に、前大納言藤原爲兼、新千載は、後光嚴天皇の延文二年、藤原爲定、新拾遺は、同代貞治二年、藤原爲明、及び頓阿法師、新後拾遺は、後圓融天皇の永和元年、藤原爲遠、及び爲重、新續古今は、後花園天皇の永享年中、飛鳥井雅世、等、各其時代〻の歌壇、牛耳を取れる名匠の、勅撰或は、院宣を承はりて撰ひしものなり、其品はいづれも皆是玉、兎や角といふはすでに愚なり、されども古人のいひし

處、又今人の語りし處、彼是を取りて粹をあつめ其一斑をのみ云んに、古今は豐裕婉麗にして、誦吟ずべきもの甚た多く、後撰は、質に近きて文足らず、拾遺は、意氣淡白にして餘韻なく、後拾遺は、漸く妖粧の風味を帶び、金葉は新奇異樣の躰を含み、詞花は、輕妙又巧緻、千載又優艶にして大ひに實あり、新古今は錦繡織り、新勅撰は、却りて新古今に及はず、續古今、及ひ續拾遺の兩集は、共に大同小異にして可、新後撰は、や、劣り、玉葉、またおのづから他にすぐれ、續千載、續後拾遺、各々撰者の家風をあらはす、然て風雅名の如く風雅ならず、されども又當代の風にもあらず、玉葉集とおなじきなりとて、誹りなすものもあれども、蓋其當を得さるの言なり。

以上、決してこれを盡さず、僅かに其面影についていふのみ、詳細のことに至りては、こゝにつくさるべきにもあらず、又盡し能ふことにもあらず、諸子たゞこれによりて其二十一代集の、名と時とのみさへも、知りたまひなば幸ひなり。

これ等勅撰集に對して、一個人の歌集ども、これを家の集とはいふ、勅撰集は時代をあらはし、家の集は人をあらはす、其數又少なきにあらざるなり、次號より、順を追ふて其一二三を解題すべし。



近着紹介

遊戯と唱歌　白井規矩郎編　神田同文館發兌

本書は唱歌に合せて少年少女の遊戯を教ゆるものなり、一例を擧ぐれば『れんげ』の唱歌に

(一)ひらいた〱　なんの花が開いた　蓮華(れんげ)の花が開いた　ひむいた
　と思たら　ちよいとつぼんだ
(二)つぼんだ〱　なんの花がつぼんだ　蓮華の花がつぼんだ　つぼ
　んだと思たら　ちよいと開いた

遊戯法

衆兒をして圓形を作らしめ之を蓮花辨に擬し最初蓮花の歌を謡ひつゝ右或は左に(教師の指揮により)廻らせ「つぼんだ」の句に至り周圍の辨(即ち兒童)をして中央に少さく集合せしむ集りたるまゝ足蹈して次の歌を謡ひ「ひらいた」に至らば花瓣を開きて元の圓形に復せしむ
或る時は幼兒を中央に立たしむるか又は中に少さき圓を二三の兒童に作らしめ之が花の心となすも可なり

といふが如し、教師、保姆等に必要(ひつえう)なる書なり(定價十二錢)

天製絲瓜の水　幸堂得知作　博文館發行

貧乏(びんぼう)なる植木屋が百金を拾(ひろ)ふた爲め却つてそれが辛苦(しんく)の種(たね)となりし事夢(ゆめ)に月界へ遊びて絲瓜(へちま)の水を取るなど翁が垢拔(あかぬけ)のせる滑稽物語(こつけいものがたり)なり、外に『清朝二十卑怯』は少年の讀物(よみもの)に適(てき)し『海に一日山に一日』は紀行文、談林風俳諧百韵をも添(そ)えたり、袖珍小説第六編

百づくし



當百

家政

リンコルン夫妻間の電報

此頃(このごろ)公(おほや)けにせられた北米大統領リンコルンの南北戰爭(なんぼくせんそう)中夫妻(ちうふうふ)の間に贈答(そうたふ)した電報を見ますと、あの苦心多事(くしんたじ)身も危(あやう)き間に、よくも斯様細(かやうこま)かに氣(き)をつけられたものと今更其人慕(いまさらそのひとした)はしうなるばかりです。つい一寸した電(でん)報(ぽう)ですが、一つ二つ譯(やく)して見ましせう。

リンコルンは子供(こども)が三人ありました。細君(さいくん)は中々悧發(なかなかりはつ)な氣丈(きじやう)な婦人で、「妾は始終頁人に成丈極端(なるたけきよくたん)のレパブリカンでなくてはいけませぬ〱」と申」と人にも語(かた)られた程(ほど)あつて、夫妻の間一方ならず睦(むつ)ましく、リンコル

ンも國家の大事を細君には打明けました。南軍長驅して北の首府華聖頓間近かに迫つた時も、リンコルン夫妻相並んで砲烟彈雨の中に立た位です。夫人は殊に負傷者の看護に心を用ゐ、或日病院見舞の途中不斗馬から落ちて怪我をしましたが、リンコルンは暇さへあれば寸時でも臥床を守りました。

母上少し怪我
心配すな

右はリンコルンが當時ハルペルト大學にある長男に發した電報で、夫婦は常に子供の進歩を妨げないやう、且は健康の事迄細かに心をつけました。首尾よく卒業すると直ぐグランド將軍づきの士官となり、戰場に出ました。



無事つくおかはりなきやタッドよりよろしく山羊はどふして居ます?

ワシントン府大統領
ミセスリンコルン發

右の返報

リンコルン宛

タッドによろしく山羊も父も無事別して山羊は

ワシントン大統領
發
ミセスリンコルン宛

タッドは三男でリンコルンの最愛の子、官邸に二頭の山羊が居つたが、父子は大そう愛して、お天氣には庭に出て、一時間も山羊相手にたのしむで餘念ない位でありました。で、タッドが電文にも山羊の事を問ふた

ので、何と戰爭中にも釋々と餘裕があるではありませぬか。

夜汽車はよせ餘り寒い明日來い

大統領

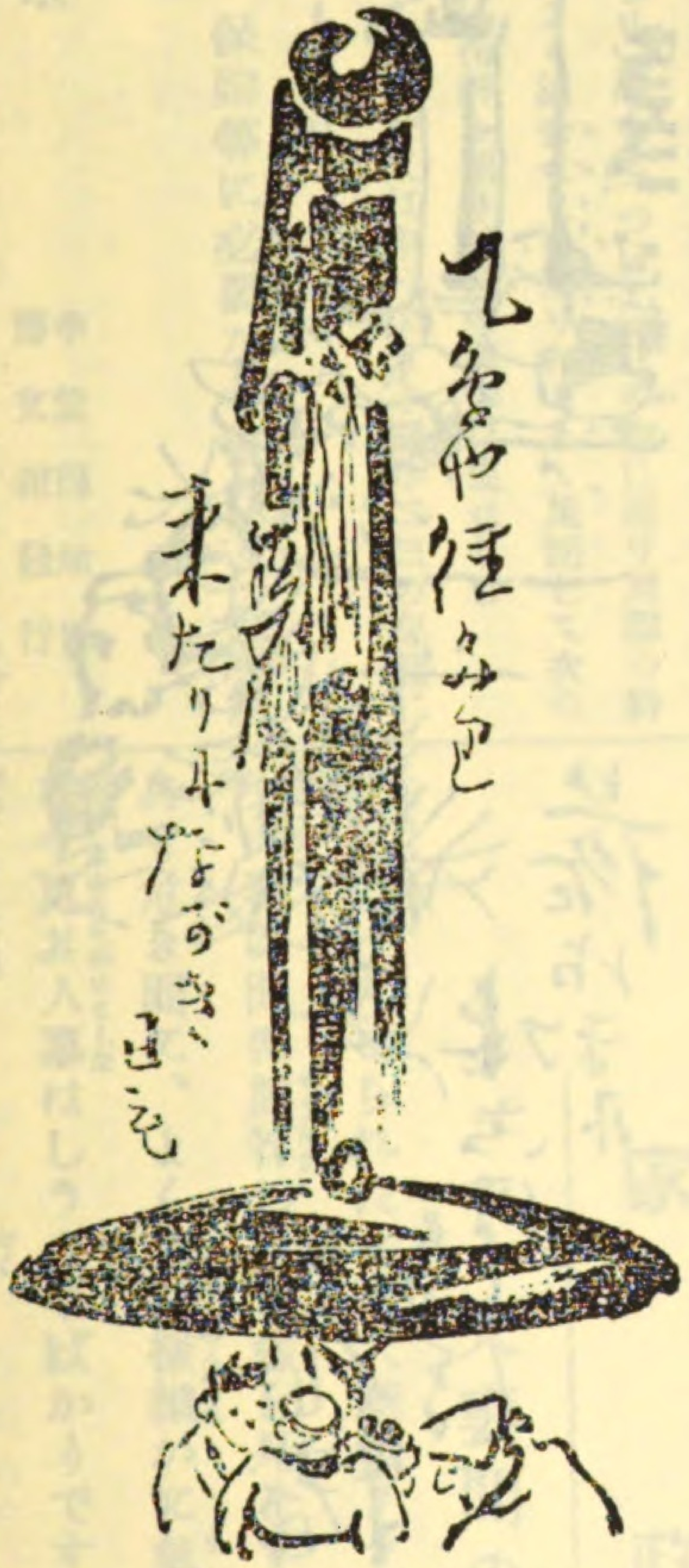
ミセスリンコルン宛

何時でもリンコルンが戰塲に出ますと忽ち參軍が振ふので、リンコルンは絶えず戰塲に往來して、夫人もタツドも共にグランドの陣營に居りました。後夫人タツドとワシントン府に歸ります時、リンコルンは陸軍卿スタントン宛に

ミセスリンコルン今日立つ面倒ながら明朝八時に波戸塲迄馬車の用意たのむ

と電報を發して置きました。右類の電報は猶幾許か知れませぬ。

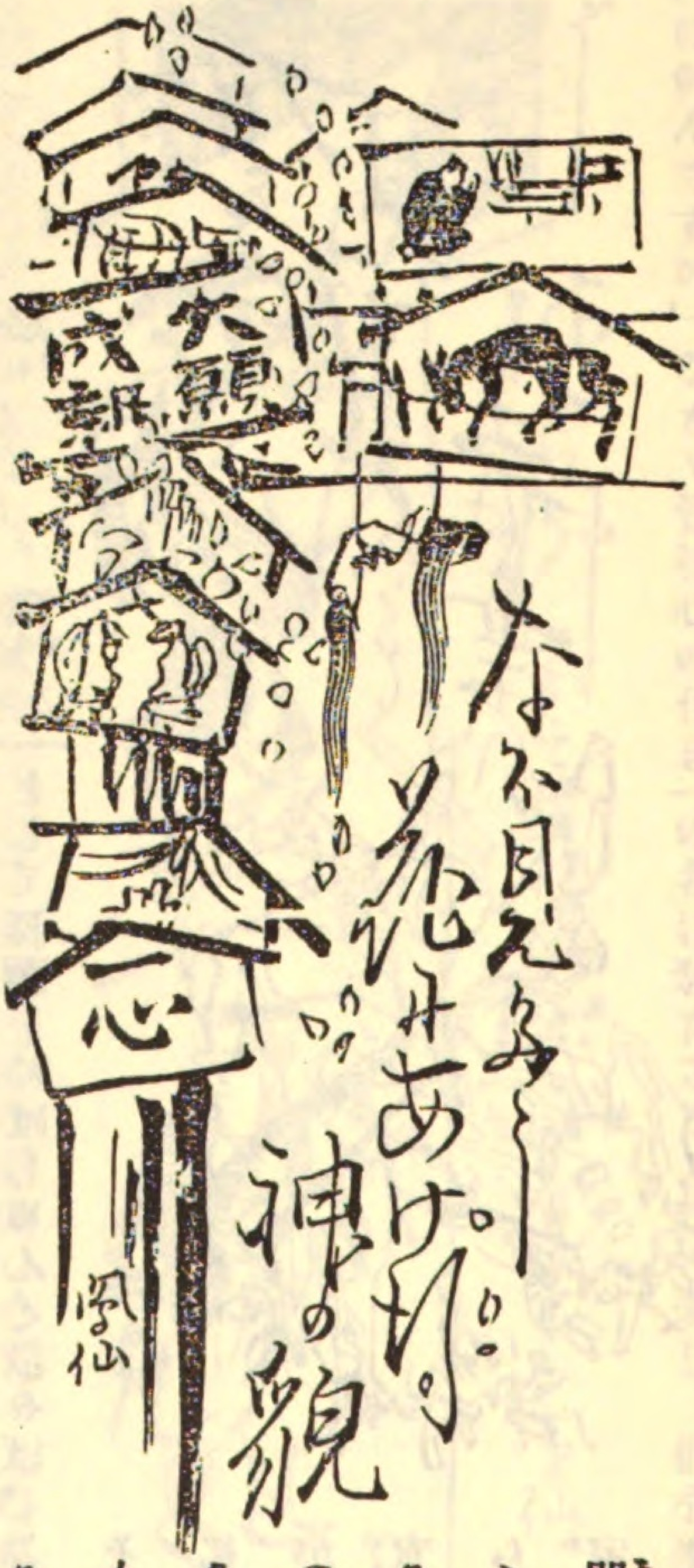
間もなく南方の首府リッチモンドをおとしゐれ、リーの軍を打破り、リンコルンも喜んでワシントンに歸りましたが、僅か十日もたつかた、ぬに刺客のために、あえない最後を遂げました。夫の心中どんなでありましよう。



躾につきて

小兒の躾には、家内の一致ほど大切なるはなし。父叱れば母引取りておゝよし〳〵泣くな〳〵となだめ、母

親小言いへば祖母抱きよせて菓子をとらせつゝ慰めすかすなど、甚だ宜しからぬことなり。さすれば第一小供に薬に砂糖をまぜて飲ましむるにひとしく、其効を減ずるのみならず、度かさなれば小兒はうらみの心を起すに至る。尤も叱咤小言は可成的少なきがよけれど、さりとて右の如くなるはわろし。例へば祖母小言をいへば他の人々も其小言に同意を表し少し位やかましかりとて小兒に味方するは決して小兒を躾る所以にあらざるなり。これと同じく喜びにもまた同意を表すべきなり。



神經の和らげ方

小兒のねざめ或はおそはれ、半睡にて泣き出すなどする時は、背をたゝくが例なれど、それよりも掌にて額を静かに擦るべし。神經を和らぐること之に過ぎたるはなし。

間食

間食の害は今更いふまでもなき事なるが、これは小兒の中に僻つかぬやう注意すべきなり。泣き或はぢれる時に煩悩又は便利より乳或は菓子を與へてきげんをとり、又いふ事きくから御褒美とて菓子をとらせる、などゝいふ風に何といへば食物を取らするは小兒の心をいやしくし健康を害ふ間食の僻をつくるものなり。よく細かに心して

泣き或はおぢれる原因を知り、やさしき言葉や所作にていやすべきなり。

家庭の裝置品と兒童

恕哉

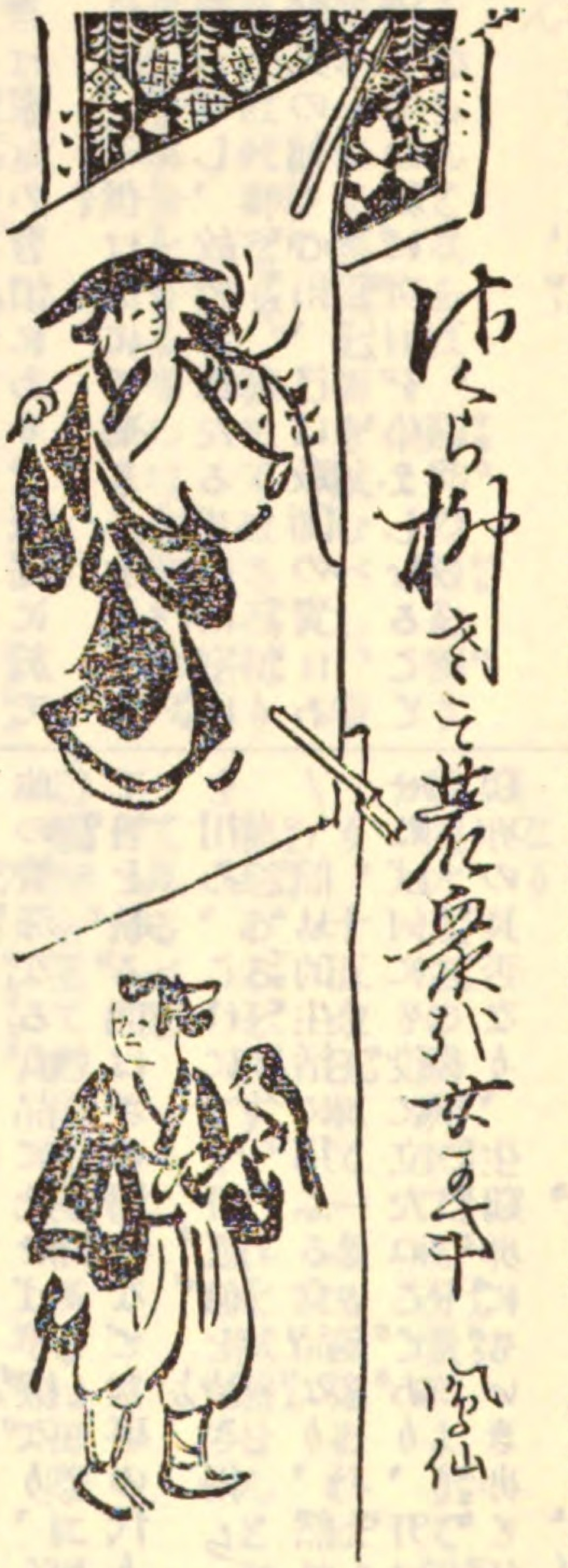
家庭敎育に於て最注意すべきは、子供に習慣を作るにあり、習ひ以て性となる、一たび性となりては、終世改悛の期なきに至るものなり、孟母三遷の敎訓は、蓋これがためなり、入世の敎育を家庭、學校、社會の三期に區別せば、家庭期は子供の腦中未だ善惡良否を識別するの能力なき時期なれば、事の良否如何に拘らず、白紙に汚色の深染し易きが如く、容易に斑痕を點ずるが故に、家庭期は最習慣を作るの好時期なりと謂ふ可し、



父母たるものが、その子供の將來に對して、其身の錦を繭に遺す蠶たらしめんと希ふや必然なり、而して蠶をして良繭を結ばしめんと欲せば、これが飼育の方法、その宜しきを得るにあらざれば得べからず、子供の養育も亦これに異ならざる可し、

家庭敎育の上より言へば、一家の裝飾品は、恰、學校の敎具の如く、父母は猶敎師の如し、壁間に掛かる扁額、床の間に吊せる懸物を始め、文案の上に並べる硯、筆、書籍、花瓶は皆子供の注意する所の材料となり、「お母さんあの額は正成子別れの繪な

の」「お父さんあの懸物は唐人の書いた字かえ」などゝ、室内の裝置品は悉、常に子供の心を惹くの資料となり、又勝手の間に裝置せる火鉢、鐵瓶、茶碗、水差し等は、一々子供の疑問を惹くの材料となりて「これは何をする物ですか」「あれは何んですか」などゝ皆物心の付きかゝる子供の問ひとなる、父母たるものが一々その問ひに滿足を與ふるは、小供の智識を發達さする道なれば、決して不當の返事をなし、胡魔化しの說明を與へ、又は誑す等のことあるべからずして丁寧に敎ふべきなり、



されば學校の敎具に、子供の心性を害すべき物品を置くべからざると同く、室内の裝置品も亦家庭の敎具なれば、子供に對して正當の說明の出來兼ねる品物や、これは子供に見すれば爲にならぬと思ふ如き品物は、決して室内に裝置せざる樣心懸けざるべからず、

井上圓了氏は嘗、名稱敎育のことを說けり、人は其自己の名に敎育さるゝこと多し、假令ば福澤諭吉氏は、其名の如く人を諭すと巧に、小幡篤次郎氏は篤實の人なり、哲學館の生徒の名に哲の字の付くもの頗多しとて、人の名は良き文字を擇みて付くべきを說けり、細微に言へば左もありなん、故に子供の敎育は極めて細微の點にまで注意して、惡しき習慣を作らざるよう父母たるものは意を用ふること肝要なり、人によりては壁間の額面も傾斜に掛くれば、

そのうちの子供の心は曲るとまで言へり、實に習慣ほど恐ろしきものは無し、壁間の額面の傾斜に掛りたるを見慣れたる子供は、若し他にて正しく掛れる額面を見なば、反つて不審を懐くなる可し、雪の降らざる地方の狗は雪を見て吠ゆといへり、されば子供の教育に於て、最注意すべきは家庭の習慣にあり、家庭に於てもし悪しき習慣あれば、子供は他にて悪きことを見ても悪事と思はざるに至る可し、故に父母たるものは室内の裝飾品や學校の教具の如く心得、己は教師の責任あるものと考へて、決して白紙に斑痕を染ましむること勿れ、

養蠶家が日夜注意して蠶兒を飼育するは、良繭を得んと欲してなり、父母たるものも充分注意して子供を養育するにあらざれば、決して將來錦に織らるべき良き繭を結ばしむると能はざる可し、

鶏卵

鶏卵は凡ての食物中、其の滋養の點に於て第一等の位地にあり、健康の人にも常用となり、病者には唯一の食物たり、疲勞したる時、或は睡眠不足などの際に生鶏卵を食すれば勢頓に増加す價廉なるにあらざれど、他の贅澤なる食品に比せば寧廉なり、されば多忙にして箸を執る能はざる場合など食事の代りに鶏卵二三個を用ゐ、これにて十分飢餓を凌ぎ得らるれば、なか〳〵簡易的生活に用ふる食品なり、然れども能く吟味せねば何にも役に立たぬことあり、其は別事ならず、鶏卵の良否なり、生鶏卵にもいき卵と死卵の別あり、いき卵とは之を鶏に抱かせて容易に孵化の出來得るを言ひ、死卵とは其詮なきものをいふ、死鶏卵とても敢て殼を割りて黄身の亂れたるもののみならず、素人の目から見れば立派に見え少しも怪しき處なきやうなれど鶏の目から見る時は、已に死したるものにて孵化

の望なきものなり、黄質と白質と全然分れありても死したるものは滋養の乏しきは論を俟たず、之に反していき卵は所謂生てあるものゆゑ鶏に抱かしむれば容易に孵化す、其成分養分あることと是亦論を俟たず、さて如何にせば生死の區別を判定し得らるゝか、卵の鑑定法と共に左に記さん

◎卵の生死の區別を知らんとならば、鶏卵の殻を割りて小皿に移し、箸などにて黄質を衝き試むべし、箸に從つて黄質散亂せば死卵なり、又箸にてはさみ切りても依然として黄白各其分を守るものは生卵と知るべし

八百屋などにて買ひ取る時は、日數經過のもの混入しあるも知れず、故に能々茲に注意すべし、鑑定の煩しきを厭はゞ、田家か又は市内の養雞家に就き生れ立のものを撰ぶか、又は自家にて雞を養ひ卵を產ましめそれを食用とすれば生鶏卵に疑なし

◎日光又はランプの光に透し見て半透明なるは良質なる卵なり

◎食鹽一、水九の割合なる液中に卵を投し、沈めば良、浮めば惡と知るべし

◎卵の兩端中大なる方を舌にて試み冷く感ずれば良質なり

◎同大きさの鶏卵にても分量によりて滋養分に差別あり、十五匁玉にて一匁も差違あれば、母雞の飼物に善惡あるを證す、これを試驗せんとならば秤にかけて見るべし

◎雞卵を煮て殻内に空洞多きは母雞に滋養の惡しき證なり、善良なる卵は煮ても空洞の部分殆ど無きものあり

◎黄質の大きく且つ十分黄色を帶ぶるは善良の證なり、滋養分少きものは黄質少さく且つ黄質稍白色を帶べり

以上の諸條に照して鷄卵の良否を判別せば不可なかるべし

炊飯と竈

飯を炊ぐまでに要する時間と手數とを略かんとせば、米を前晩に磨ぎ置くを良とす、これは手廻善きのみならず焚上げてより噎ゆることと磨立の飯より遙かに遲しといふ、時間を略く法は釜の尻へ火力を強く當て、多の熱を取ることとなり、而して釜の尻は始終勉めて滑く磨き置くをよしとす、又火力を取る燃料即薪につきても注意を要す、薪は能く乾燥して燃え易ものを用ゆるを儉約とす、然るに世間にて乾きたる薪は「むだ燃」して「こたへ」惡るしと云ふは大なる誤にて、乾燥のもの程能く燃えて火力强ければ尻を熱する早く隨て飯の出來も早き道理を知らざるものといふべし、薪の燃えて火を發し熱を出すといふは薪の中に含む炭素が空氣中の酸素と化合して炭酸を生ずるに依てなり、されば竈の口には常に空氣の入込む樣にし、その外に絶えず此の炭酸を吐き出す樣にし、酸素隨て入れば炭酸は隨て出さゞるべからず、されば是非共竈に烟突の設を要すれど、今日本にかゝる裝置のものあらず依て自竈に工夫をなし、釜と竈の間へ瓦の缺を挾みて兩者の間を少しく透せば自然右の理屈に協ひて、通常より二倍以上時間を節し得るなり、また家によりて竈に銅壺を附くる處あれど、是は甚だ迂遠の法にて、徒らに火力を散らして益も無き竈を温むるものなれば、湯を欲する時は別に沸すべし、又飯の焦附を恐て鐵葉板を釜底に入るゝものあれど、とは薪を餘分に要すれば甚だ損なり、また飯の沸騰を見ば徐々と薪を減じ湯氣の音が漸く靜に成る頃を待つて釜を外し、四分間程蒸し置くべし、御櫃へ移すは手早く釜を搔廻して大氣に觸らしめたる後にすべし、右の方法に據る時は時間手數を節

減するのみならず、焦附くことなく湯漬にして潤ることなく、味も極めて旨しといへば厨事に苦む人早速試みては如何。



女子職業案内

罫紙摺の内職

此の内職は半紙、さづか、美濃紙等の紙に罫(赤、青、黒等)を摺るものなれば如何なる女子にも容易に營み得るなり、賃錢は技の巧拙、仕上の出來不出來、又紙の種類により各差あれど大抵一〆にて七錢より十五錢を得、熟練の者に至りては一日に二〆も三〆も摺上げて貳拾五錢以上を得るといふ、場所の一は日本橋區濱町有馬學校側の古川商店といふなり、又同店にては其他に倘ほ銅酸引、狀袋の貼付等の内職もありといふ。

英文一斑

(二)

前號には、英文書翰の必要と其の種類を論じたれば本號には冗長なる事は省略し、直ちに進みて英文作法規則に移らん、正則なる英文書翰は左の六ヶ條の事を載すべきものなり

第一、年月日　第二、尊稱　第三、書翰の趣旨　第四、結尾の語　第五、住所　第六、姓名

年月住所を記載をするに二ヶの方法あり、一は書翰の右側上に差出人の住所を記し、次の行に年月日を記すべし、一段下り左行に受取人の姓名を記し、次行に夫々の尊稱を記すべし。假令ば、差出人は東京麹町二

丁目三番地櫻花子にして投函月日は一千八百九十七年四月二十五日なりとせば先づ左の如く記載するを通常の方法とす、

No. 3, nichōme, Kōjimachi, Tokyo,
April 25th, 1897.

Miss K. Kaneko.

My dear Miss :—

時としては1897と記さず單に97と記す事あり、假のNote〔書翰〕には年月日を記さず只 Saturday 若しくは Monday とのみ誌すを得べし、要するに此一行は年月を正確に記すべきものとして見れば誤なし。軈て書翰の文句も終れば其の右側に結尾の語を記し其の下行に差出人の姓名を記載すべし。

I remain, my dear miss,
with much respect,
Yours sincerely,
Sakura Hanako.

結尾の文句に就きては追々論ずべきも、斯の如く長々しく誌すの必要あるにあらず、時と場所に應じ、差出人の判斷に一任す、若し受取人の姓名の下に年月住所を記載する場合には、書翰結尾の左側に記す、假令へば……………………

I remain, my dear madam,
with much respect,
Yours sincerely,
Sakura Hanako.

No. 3, nichōme, Kōjimachi, Tokyo,
April 25th, 1897.

長文の書翰に於ては、第一の方法を最良とし、短文の書翰にして一ページを以て結ばるものは第二の方法を以て最良とす、愛する親友若しくは親類縁家の者は、書翰の上方に於ける、受取人の姓名を略すは餘り固くるしき儀式に流れず却て味あり、

Kōjimachi, Tokyo'
April 25th, 1897.

Dear Omatsu :—

I write, etc.

右の場合に於ても、書翰の終りに、受取人の姓名を全く記すをよしとす、何となれば、封筒の失せて發見するを得ざる場合には甚だ大切なれば也、而して封筒を用ゆる際には、明瞭に其の表面に左の如く誌し、中に書翰を挿入すべし

Miss Umeko Murata,

c/o Mr. S. Kaneko,

No. 2, Ichibeicho,

Azabu,

Tokyo.

c/o の記號は Care of の儀にして日本文の何某「方」若しくは「内」に相當す、外國行の手紙なれば、該國の名稱を明記せば、外國の書翰には種々と畧字ありて、英文の達人にても、時には、閉口せざるを得ざる場合多し亞米利加合衆國諸州の畧字を擧げん、是れ徒勞にあらずと信ず

The United States of America = U. S. A. Maine = Me. New Hampshire, = N. H. Vermont = Vt. Massachusetts = Mass. Rhode Island = R. I. Connecticut = Conn. New York = N. Y. New Jersey = N. J. Pennsylvania = Pa. 若くは Penn. Delaware = Del. MaryLand = Md. Virginia = Va. North Carolina = N. C. South Carolina = S. C. Georgia = Ga. 若くは Geo. Alabama = Ala. Mississippi = Miss. Missouri = Mo. Louisiana = La. Tennessee = Tenn. Kentucky = Ky. Indiana = Ind. Ohio = O. Michigan = Mich. Illinois = Ill. Wisconsin = Wis. Arkansaus = Ark. Texas = Tex. Iowa = Io. Florida = Flo. Oregon = O. California = Cal. Minnesota = Minn. District of Columbia = D. C.

其他英吉利士、佛蘭士、伊太利等の各國にも此種類の畧字甚だ多からん、亞米利加には諸君の最愛の人、親友、知己尊敬多あり故に茲に蛇足ながら、斯かる多くの畧字を掲げたるなり、又人の位置職掌に對して、尊號として用ゆべき若干の畧字あり、耶蘇教の教師には

Rev.といふ文字を用ゆ、是はReverendの略字にして尊敬の語なり、同じく該教の大僧正にはRight Rev.と記し、醫師の稱號はDr. 若くはM. D. なり、Dr. を用ゆるときは名稱の先に用ゆ、—Dr. Sakurai—而してM. D. は名稱の後に用ゆ、T. H. Sakurai, M. D. 國會議員にはHon. の稱號を附す、Hon. S Tanaka の如し、大學教授にはProf. の稱號あり、其の數や殆んど限なし、只だ茲に一例を掲せるのみ、尙ほ封筒の事につき一言せんに印紙は封筒表面の上方左側に貼用すべし、封筒の臘付は合目の下紙に先づ一片の赤臘を附着せしめ而して後に適當に之を臘付するを可とす。

英文書翰の數は凡そ十四種もあれ共、其の中、素人考の及ばざるものは招待狀なりとす、何れの國を問はず儀式的文書は、困難なれ共、殊に歐文に於て甚し、他の作例は追次に述ぶる事となし、今茲には尤も單簡なる二三の例を擧げんとす、

Miss Hana's compliments to Mr. Ando, for
Wednesday evening, April, 18th at 8 o'clock.

是は最も簡にして盡せる招待狀なり、意譯すれば「來る四月十八日水曜日晩刻八時御來臨願上候」

花子より
安藤樣

斯くの如く何某のコンプリメンツ、ツウ、何某君と記せば以て足れり、豈簡ならずや。婦人より婦人に送るものは更に一層丁寧なり、Miss Hana requests the pleasure of miss Kane's company on Wednesday evening, April, 18th at 8 o'clock. 本文に於ては「Requests the pleasure of」といへる語極めて味あり、直譯して「何々の樂を望む」なぞにては一向合點するを得ず、然れ共、招待狀の丁寧なる書方として考ふるときは其の意味自然と明瞭ならん。

百づくし



百獸の王

寄書百珍

摸範的婦人

早稲田　仁柳子

性質、無邪氣にして快活に而かも優美閑雅にして眞に心から己れより下の者即ち下婢、僕などを憐むの情ありて加ふるに多少の愛嬌を顔に心に有し而していざといふ場合には膽力の据はる者

品行、日本の婦人としては貞節といふこと云ふ迄もなきことなれどいざといふ場合に臨んでは敵を殺すか己れの身を捨てゝも其節操を汚さぬ程の氣慨あり、而して謙遜にして高ぶらず途中知人に遇ふても先方から頭を低げねば己れから先き頭を下げぬなどと誇らぬ勝氣を出さず多少の敎育あり才氣あるも外貌に顯はさぬ程のたしなみあり（つまらぬ小説を書きたがり文藝倶樂部に寫眞を出して貰ひたがるなどは眞平なり）其他内政に勵み父母舅姑に優しきなどは勿論たる可し

志操、己れの夫を定むるに容貌や財産學識や又は才能なども心を移さず高潔にして眞に自らを愛する人に己の愛を獻げ榮譽の順境に在る人よりは寧ろ轗軻不遇の逆境に立てる人を己の夫に撰み其不幸を慰めて世に樂しき人幸福なる者と爲さんと志す程の者

余が摸範的婦人詳く說かば尙ある可れど要點は右の如くなん

摸範的婦人

齋藤正次

世界各國其風俗の異るに從て婦人の習慣も亦異る所ろありと雖其性質其品行其志操に至ては西洋中未開國はいざ尙も獨立國家を成せるの國に於ては豈毛頭の異る

あらん請ふ試みに其如何なる性質如何なる品行如何なる志操を有する婦人か理想に適するかを一言せん夫れ婦人の性質は温和を主として陰に過ぎず陽に過ぎず其品行謹重靜容にして志操一度定むれば終始變ずるとある可らず斯の如きの婦人は即ち理想に適する婦人にして實に社會の摸範的婦人と曰ふ可きなり

摸範的婦人

下野 子の日の松

題して摸範的婦人と云ふ余は恐る應募の文意千篇皆一律に出でんことを然れども試に余が理想を云はんか第一性質に於ては温良なるを欲し第二品行に於ては貞淑なるを欲し第三志操に於ては高潔なるを欲す之れを花に譬ひんか性質は櫻の如く品行は梅の如く志操は菊の如きを欲するなり其嫋々たる玉枝東風に吹かれ落英紛々たる處其寒氣凛々の裡積雪と白を爭ひ楚々たる清香を放つ處其秋陽に烘り深霜に傲り幽姿肅々たる處芳齢として婦人の美德たる温良貞淑高潔の三性格を認取するを得ん此の三性格を具備したる婦人こそ予が理想に映ずる摸範的婦人なり否萬人の理想に映ずる摸範的婦人ならんか

摸範的婦人

無名生

小生の摸範的婦人は三の力を要し候

(第一)頭の力 頭の強と言ふ意にあらず怜悧なるを意味し候即ち

(一) 分別、謹愼、常識の婦人

(二) 决斷力あり、意思弱からず、然れども女らしかるべし、男らしきにあらず

(第二)手の力

(一) 主婦としては勉強と精力

(二) 家妻としては儉約、準備、深思

(三) 家政者としては清潔、趣味、純美、快活

(第三)心の力

(一) 親切と慈愛

(二) 貞節と誠實

(三) 慈善と仁恕

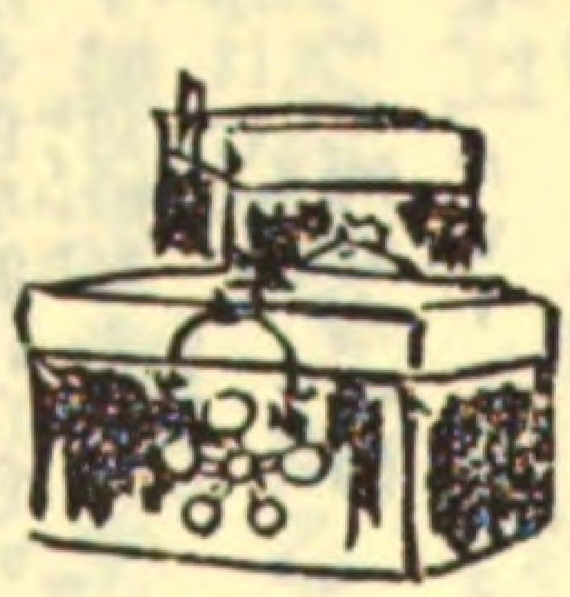
摸範的婦人

在浪華 篠田虎五郎

貝原益軒云へり女に四行あり一に婦德、二に婦言、三に婦容、四に婦功此の四ッは女の務め行ふべき業なり婦德とは心だて善きを云ふ心貞しく深く和順なるを德とす婦言とは言葉の善きを云ふ詐りを言はず惡言を致さず言ふべき時言ひ無用なる事を言はず婦容とは形容の善きを云ふあながちに飾りを専らにせざれども女は容、嫋かにて雄々しからず裝ひのおでやかに身持ち奇麗に衣服も垢つき汚れなきを云ふ婦功とは女の務むべき業なり縫ひ物をし紡み績ぎをし衣服を整へ専ら務むべき業を事とし戯れ遊び笑ふことを好まず飲食物をこいろよくし舅、姑、夫、賓客に進むる是れ皆婦功なり此の四ッは女の盡くべき務めなりと以上の四ッを備ふれば申し分なき婦人たるべし事少しく古めかしき樣なれども此の心を以て心とせば世に貞妻賢母となり忠君愛國の士を出だす亦た難きにあらざるべし是れを以て婦人の摸範となすに憚るなきを信ず

〔社告〕此問題に係る寄書陸續し來るを以て次號即ち百一號にも『摸範的婦人』の投書を載す、倘續々投寄の勞を煩す

百づくし



百萬石

社交一斑

流行の栞

流行子

夏向洋服附屬品

前號には流行の洋服を記したれば、今號には其附屬品即ち帽子、襟、襟飾、カフ等の流行を案內せん

帽子の流行品は目下紳士向には、英國クリスチー會社の「テーライ」形（中折）最も人氣あり、頂上に空氣ぬきあるもの最も可、色は淡茶、淡鼠第一位を占む、鳥打帽は昨年と大差なく一頂製なるがよし

麥藁帽子はちと時候に早けれど、矢張一文字の鍔のやゝ大きなる方（昨年よりも）流行の傾向あり五十錢內外のものは中等以下は、一圓內外は中等以上の社會

パナマも勿論流行すべし、併し直段は昨年よりも貴し、普通は四圓內外上等は十二圓以上

南傳馬町大津屋にて今年始めて英國より取り寄せしはグリン會社製造の龍尾製の中折なり、還はハナマを用ゆる紳士社會に行はるべきものにて其色は稍黃色を帶び躰裁美なれば此夏の流行社會に願る望あり、こは彼國に於て中々流行せり、價は四圓以上なりと

ヘルメット形にも種々新形あれど、丈低き日本人には倒底不向なり

襟は折襟第一の流行にて今年の新形は襟が二重になつたる折襟なり、交際社會にちら〳〵見受けらる、立襟ならば兩端の三角に折れたるものよ

し

襟飾は長き形にして大きを可とす、夏は殊更洋服の胸明広きを以て、襟飾は榮あり、併し濃厚き色を避け白色か、白色に近き色を撰ぶべし

「カフス」は丸形ならず、角形なるべし、鈕を用ゆるに重れずして相互に接合せしめ、女夫鈕をはむべし

オッーパルと沈香木の櫛

「タイヤモンド」は貴し、「ルビー」も「サフワヤ」も最早珍らしからずとてか、近頃オッパールと稱する一種の光彩を有せる寶石を指環などに鈸めしもの、貴女社會に見受けらる、此寶石の面白きは不思議なる光彩あり晝夜其色を變する事なり、珍奇を好む流行社會に持囃さる

大四白牡丹にて計嶋中の沈香木の櫛は、勿論未た世に出でざれど、かゝる名木なれば意匠を伴ふなるべし、沈香は伽羅と共に香も名も高きものなるが、場合により此櫛を二つに折つて火中に投する澁氣社會のものあるや否や、兎に角贅澤を好む人の用品なり

百づくし



百事如意

獨乙大學生の決鬪（上）

德富蘆花氏第百號發刊を祝して一文を寄せらるゝ筈なりしも、病の爲めに執筆なりがたく予も短篇小說を掲載することを豫告せしも故ありて果さず、故に最近の「スツランド、マガジン」より此文を飜譯して其責に代ゆ

此文章は獨乙に遊べる英の學生が親しく獨乙大學生の決鬪の狀を目擊し之を記述したるものなり、決鬪さし言へば果合なれど封建の時代に日本の武士が一命を賭する果合にあらず、言はゞ一の形式の如きのみ、頗る兒戲に類するもの多し

金子春夢

父上私の名譽は滿足に達し候其次第は一週間前某と呼ぶ「沈默せる若者」と出遇候際彼は唐突に私の犬の尾を蹈み候故私は彼に決鬪を申込候處先方も早速承諾其次日愈ゝ決鬪を執行候敵は左頰に惡長き傷を受け私儀は二個所の傷を蒙り其一は眼の下其一は頭部にて候傷は非常に痛み候へ共やがて美しき刀痕と相成べく候此寫眞は繃帶の後直ちに撮影仕候御一覽被遊度右決鬪の結果御通知申上候嘸々父上にも御滿足のことと存候云々

這は獨乙大學生の一人が決鬪の結果を其父に報せし書簡なり、父は此書簡を見て卒倒するまでに喜びぬ、何となれば其子の顏に第一の刀痕を印せしを恰も初陣の武士が戰場にて敵の首級を上げたるが如く思ひ做せば也。

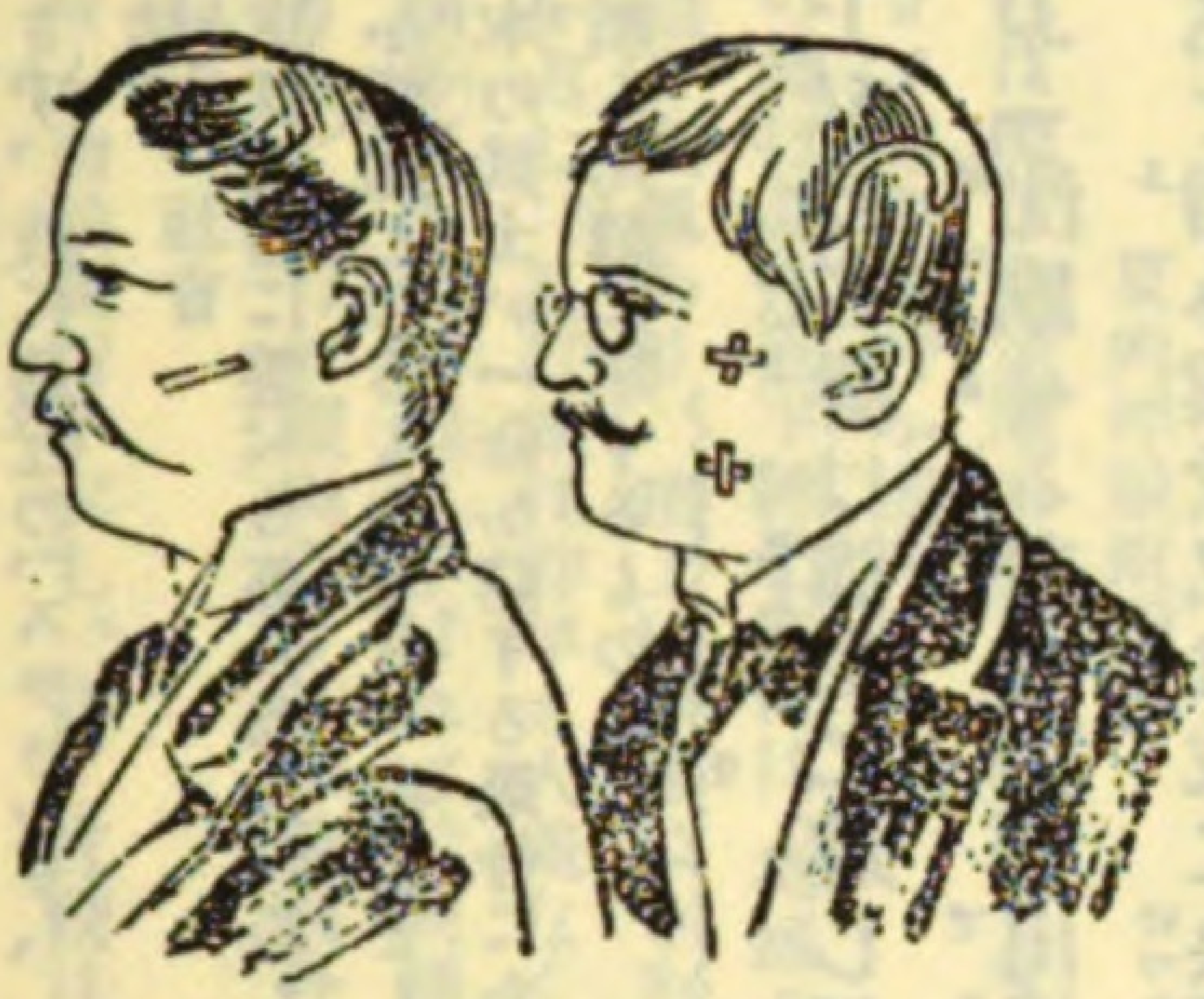


父に贈りし寫眞

かゝる事實は此事情を知らざる人民には虛のやうにも思はるれど、獨乙大學生の決鬪は確に世界の一珍奇なり、獨乙に旅行する人は街上にて、顏面に刀痕ある男子に遇はゞ直ちにこれぞ決鬪の結果なるを悟るべし、獨乙の學生は口論の代りに直ちに劍を執

つて一戰闘と一刀痕の分時を急ぐを知るべし。

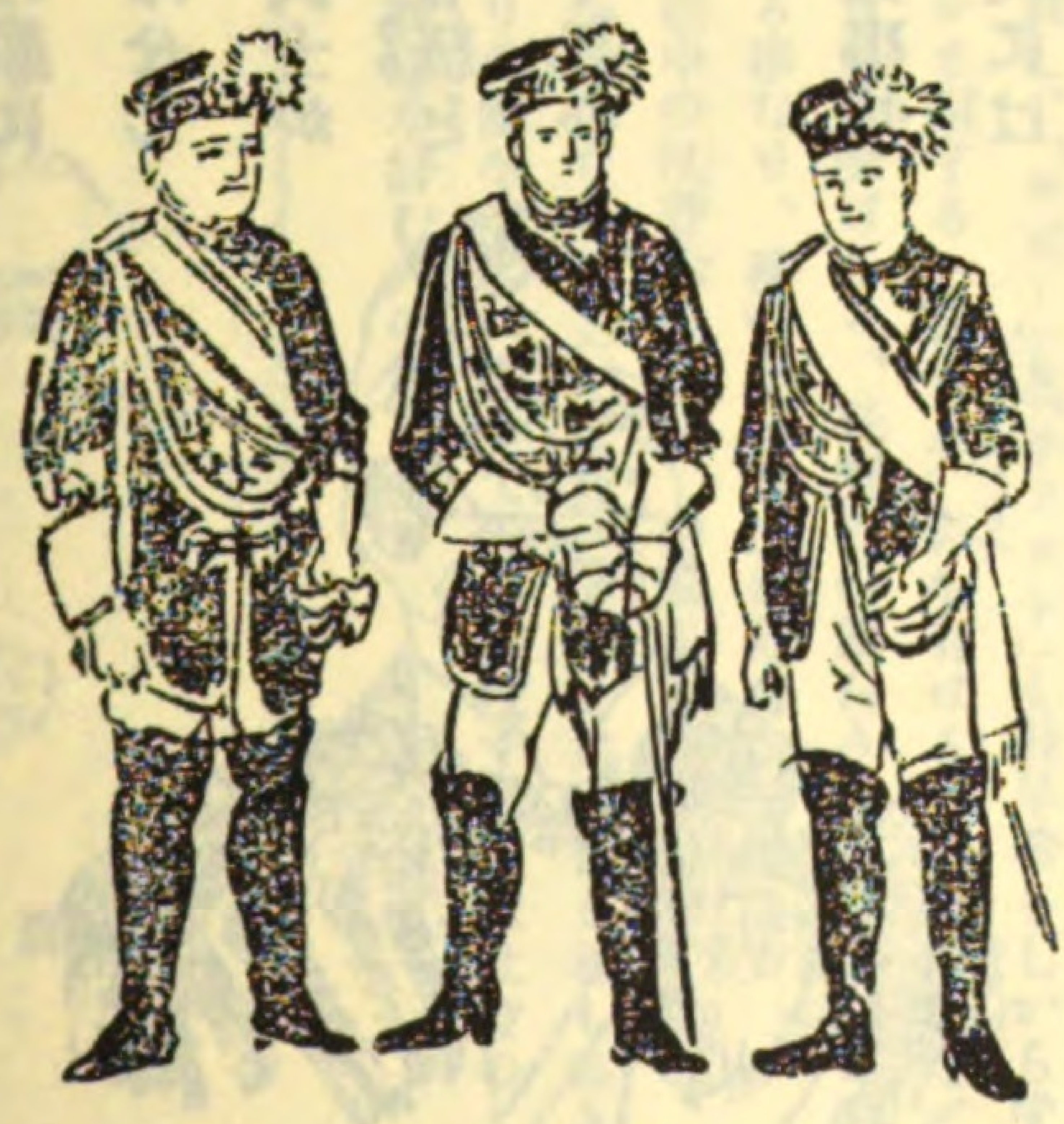
獨乙に於て決闘は法律によつて禁止せられ居れども此陋習は亭々として桂木の如く成長す、ビスマークの決闘好なることは世界に評判高く、「カイゾル」(獨乙皇帝)も好ませられ一回の決闘をば行はせられたり、「カイゾル」によつて重ぜられ、獨乙學生に重ぜらるゝ決闘は到底法律の强制も之を止むること能はじ。



決闘の結果

獨乙決闘の形式は少しの複雜はあれど、大率大別して二種となす、第一種の形式は前に述べたる子より其父に當てたる書面中にある場合、第二種は合意の上より成るものなり

第一種の形式を言へば、今茲に決闘に熟練して何人にも凌辱を與へて何人も恐れざる男子あり、其愛犬を率ひて學生等の混入せる料理屋などに入り込み、犬の尾を蹈め蹈まずとの爭論より丁寧なる決闘狀を送付せられ日を期し早朝森の中にて執行すれども、決闘時間は僅に數分時間にし些少の刀痕を頭又は頰に受くれば、以て其名譽心を滿足す、而して兩人は忽ち手を握りて親友となり、傷癒たる後は自づから其刀痕を樂む、然れども一回の決闘に滿足せず尙ほ刀痕を欲する時は再び右の如き順序により決闘を行ふ



獨逸學生倶樂部の役員

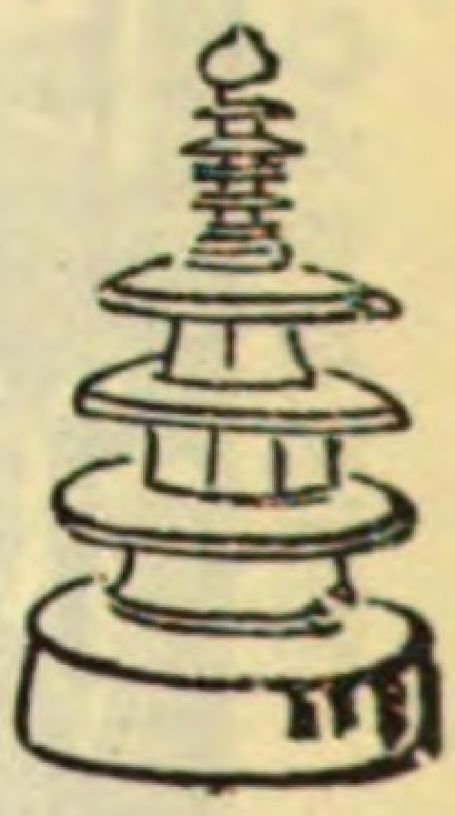
第二種即ち合意上の決闘は、倶樂部に屬する獨逸學生の間に成り立つ、倶樂部の會員は必らず一回は決闘を行はざるべからず、若しいつまでも決闘を起すべき機會なければ、倶樂部の會長より一定の期日内に之を行ふべき事を命令す、命令せられたる會員は敵手を撰ばざるべからず、適當の敵手なき時は、最も親しき友人を撰ぶことあり

併しながら合意上の決闘、他の倶樂部との間に起るもの眞の意味なり、譬へば一の倶樂部員が他の倶樂部員に、君と決闘すべしと申込めば、直ちに決闘成立す、決闘は毎土曜日、冬季は朝の七時より、夏季は朝の六時半より開始す、種々なる倶樂部は種々なる名稱によりて決闘の塲所に進行す。

當時獨逸大學生の重なる倶樂部三あり、一を「コルプス」(Corps)、一を「ブルシエンスチヤフツ」(Burschenschafts)、一を「フエルビンヅング」(Verbindungs)といふ

是等決闘の眞景は挿畫と共に次號に記さん

百づくし



百萬塔

歌苑

早春山　　蓬軒

風はまたさゆるものから春きぬと いへはやかてもかすむ山かな

春夢

あかつきのまくらにたかく鶯の こゑきゝながらさむる夢かな

旅夕

やどるべき里やまちかくなりにけむ

もりのかなたに煙たつ見ゆ

春曙

ほつかなるおぼろ月夜のうぐひすの
聲より志らむ春のあけぼの

海邊霞

ときいてし海士の小舟の見えぬまで
かすみこめけり春の海原

芝浦にて

芝の浦志ら波たてゝふく風に
まかせてかへる海士のつりふね

次號(百一號)豫告

女天文學者マリヤ、ミッチェル　K、M生
那須野孤兒院曉星園(插畫)　酒井生
世界巡査の話(插畫)　三鷹子
土筆の科學談(插畫)　天水生
なさけの杯(下)　松ヶ枝女史
智圓尼物語　一葉庵主人
狐のレイナード(終)插畫　勝間禪夢
獨乙大學生の決鬪(下)插畫　金子春夢譯

右は本日まで決定の分
四月廿五日

家庭雜誌社

百づくし



百姓豐年

（明治二十五年九月十四日遞信省認可）

金賞牌　名譽金賞牌　名譽金賞牌　金賞牌



受領　受領　受領　受領

●蜂印香竄葡萄酒



はち印

登録商標



本品は内外各大博覽會に於て夥多の賞牌を受領し就中海外大博覽會より得たる金賞牌は上掲の如し近來葡萄酒の種類多き中に其品質の卓絶なるは喋々を要せずして瞭然たり

本品は尤も營養分に富み之を日常の飲料とせば血液能く循環し食物能く消化して精神常に活潑となり殊に其味甘美にして何人の口にも適せり

本品は全國到る處に販賣店あり蜂の商標と近藤利兵衛の名義を篤と御認めの上御最寄にて陸續御購求あらんことを希ふ

賣捌元

洋酒問屋

東京市日本橋區本町二丁目九番地（電話本局四四三番）

近藤利兵衛

東京市京橋區西紺屋町二十六番地株式會社秀英舍印行